

歴史教育における記憶の取り扱いについて（2）

－日露戦争の表象を巡って－

高橋 健 司

はじめに－戦争の記憶を巡って－

1. 日露戦争の「記憶のかたち」－記念される軍艦－
2. 記念艦「三笠」に見る日露戦争の表象
 - (1) 大正末期から昭和初期の「三笠」
 - (2) 敗戦後の「三笠」
3. 巡洋艦「ワリャーグ」の顕彰と記念艦「オーロラ」に見る日露戦争の表象
 - (1) 帝政末期の「ワリャーグ」
 - (2) ソ連時代の「ワリャーグ」と「オーロラ」
 - (3) ソ連崩壊後の「オーロラ」と「ワリャーグ」
4. 日露戦争の記憶と歴史授業－歴史表象の現在性を学ぶ－

おわりに－忘却される記憶を巡って－

2005年度宮田研究奨励金の交付を受けた。

はじめにー戦争の記憶を巡ってー

戦後60年を経た現在、戦争体験者の高齢化と共に、戦争の記憶の風化を危惧する声が、次第に高まっている⁽¹⁾。しかし、そこで問題にされる戦争の記憶とは、そのほとんどが最も新しいアジア・太平洋戦争に関する記憶であり、100年前の戦争の記憶が話題とされることは少ない。

100年前の戦争ーすなわち日露戦争の記憶は、もはや直接体験した世代はなく、体験者が語る術を持たない以上、それは記憶という視点では省みられないのかもしれない。またそれは、戦後100年の時間の経過と共に、いつしか「歴史」と呼ばれて定着していることの現れとも言えよう。

だが、記憶から「歴史」へと移行するプロセスとは、一体どのようなものであったのだろうか。そのプロセスの中で、どんな記憶が公的なものとして語られ、また忘却されてしまったのか。そして、その背景には如何なる社会的状況が存在したのか。こうした視点から、今なお日露戦争の是非が論じられている歴史教育において、日露戦争の記憶の表象に焦点を当てたいと思う。

そして、一見捉えどころがない記憶にアプローチするために、戦争の記憶を表象する記念碑等の「記憶のかたち」を手がかりとしたい。昨年私は、拙稿「歴史教育における記憶の取り扱いについてーヴァンドーム広場の記念柱の教材化を事例にー」において、ナポレオンがアウステルリッツの戦いを記念してパリのヴァンドーム広場に建立した記念柱に注目し、この記念柱が、ナポレオン戦争後の19世紀フランス社会の大変動に合わせて変化を遂げる姿を通して、ナポレオンとナポレオン戦争の記憶の表象を可視的に捉えることが出来た⁽²⁾。

それは、かつてフランスの社会学者モーリス・アルヴァックスが、個人の内的な記憶と対比される、社会的かつ歴史的な性格を持つ記憶を「集合的記憶」と呼び、「集合的記憶」が社会的に持続するのに必要な「社会的枠組み」の存在を唱え⁽³⁾、また、アメリカの歴史学者パトリック・H・ハットンも、「個々人のもつ過去のイメージは束の間のものでしかない。イメージは、共同体全体が定義する概念構造のなかに位置づけられてはじめて『覚えられる』のである。集団の認可という生命維持装置がなければ、個々の記憶はしおれて消えてしまう」とし、「われわれは生きた記憶のなかでたえず過去を創り直している」と主張するように⁽⁴⁾、歴史的記憶を表象する記念物は、それを制作した社会を映し出し、その社会の変化、「集合的記憶」の「社会的枠組み」の変化に伴って、「記憶のかたち」も改定されると考えられる。それゆえ、「記憶のかたち」を通して想起される過去のイメージや歴史像は、固定的なものではなく、社会的文脈との関係で絶えず創り直されている、と言えるのである。

そこで本稿では、日露戦争を記念する軍艦という「記憶のかたち」を手がかりとして、20世紀の日本とロシア双方における日露戦争の記憶の表象とその社会的背景を考察し、歴史授業において日露戦争の記憶を取り上げる意義と方法を示したいと思う。なお、本稿は日露戦争自体の意義・評価を論じるものではないことを付言する。

1. 日露戦争の「記憶のかたち」－記念される軍艦－

2004（平成16）年、日露戦争100周年を記念した新聞の特集で、「民族の誇りここに」と題して、記念艦として横須賀に保存されている「三笠」が、写真と共に次のように紹介された。「民族の誇り。三笠は現代では死語に近い言葉を、見学者の胸に想起させる稀有な場所である」⁽⁵⁾。そして、翌年5月27日、この記念艦「三笠」前で、日本海海戦100周年の記念式典が挙行され、それに合わせて戦艦「三笠」の模型が、東郷元帥のフィギュアと「三笠艦橋の図」のポスター付で発売された⁽⁶⁾。（図3参照）

一方ロシアでも、日露戦争緒戦の仁川沖海戦で沈んだ巡洋艦「ワリャーグ」の敢闘を称えた記念碑を制作し、2004年2月、この記念碑を韓国の仁川に運んで建立、その除幕式には現ロシア海軍の同名のミサイル巡洋艦「ワリャーグ」が訪問して参加した⁽⁷⁾。そして、日本同様、巡洋艦「ワリャーグ」の模型が発売された⁽⁸⁾。（図14参照）また同年には、サンクト・ペテルブルクのネヴァ川に浮ぶ記念艦「オーロラ」において、日露戦争を記念する行事も行なわれた⁽⁹⁾。（図16参照）

このように、日露戦争から100周年という節目にあたって、日本とロシア双方において、現在でもなお、軍艦は記念され続けている。では一体なぜ、軍艦は記念・顕彰されるのであろうか。

例えば、戦艦「三笠」を「まったく数奇な命運をたどりながら黙々と、且つねばり強く生きのびてきた艦であり、東郷元帥に培われた“人格”をもった軍艦」と称える作家・戸川幸夫は、その根拠としてアジア太平洋戦争中、彼が海軍報道班員であった頃に、取材した海軍士官から「軍艦には人間と同じく性格というものがある」という話を聞いたことを挙げる⁽¹⁰⁾。その士官は戸川に、軍艦とは「最初のうちはやはりただ浮んでいるだけの船

にちがいないのです。そこに艦長以下が乗り組んで訓練が始まる。時には司令長官が乗ることもある。そうすると司令長官なり、艦長なりの気分というものが、その艦に張るのでしょう。始めのうちは軍艦が人間に従うわけですが、艦長もいくたびと代が替り、乗組員も移動してゆく。当然、新しい乗組員がやってくる。もうそのころは軍艦にはその艦の気風が出来ていて、そこに入ってきた者はその気風になじまざるを得なくなる。つまり人間がこんどは軍艦に従うようになるのです。軍艦が古くなればなるほど性格がはっきりと現われ、もう物体ではなく乗組員と一心同体の戦友という感じになってくるものです」と語ったという。

これに対し、日露戦争に参加した海軍兵の手紙を分析した、茨城大学名誉教授の大江志乃夫は、「最新の科学技術力を凝集させた巨大な戦闘機械である軍艦という視覚的存在」の大きさや、「はるか雲の上の天皇の意思という目に見えない存在が、海軍では金色に輝く菊の紋章をへさきにつけた巨大な鋼鉄の戦闘機械というヴィジュアルなかたちに物化」されるという軍艦の特徴を挙げ、この結果、軍艦は「兵士たちの日常を全時間的、全人格的に包みこんで」おり、「海戦で直接に戦うのは個々の兵士ではなく軍艦であり、兵士たちがその生命を託しているのも軍艦であった」と意識されていたことを指摘する⁽¹¹⁾。

すなわち軍艦とは、それを「誇り」と感じる人々にとって、まさに「国家の威信」を象徴するシンボルであり、その活躍は、まるで「人格」を持った存在であるかのように、擬人化されて語られ、兵士が榮譽を称えられるのと同様に、名誉ある戦いの記憶に対して、軍艦の記念・顕彰行為（メモレイション）が行われると言えよう。

また同時に、軍艦に対するメモレイションは、様々な「かたち」を生み出す。古くはトラファルガー海戦に参加したイギリスの「ヴィクトリー

号」や、アメリカ独立戦争に参加した「コンスチチューション号」のように、軍艦そのものの「かたち」を保存・展示して記念艦としたり、軍艦を称える記念碑・顕彰碑の建立や歌・映画の製作、さらには玩具やポスターといった商品の「かたち」にすることで、人々の記憶に留めようと意図されたのである。

そして、日露戦争に参加した軍艦についても、日露双方で活発にコメモレーションが行なわれてきた。日本では、戦艦「三笠」を記念する動きが大正末期に始まり、現在まで、記念艦として保存・展示が行なわれている。

(図1参照) またロシアでも、帝政末期から現在まで、巡洋艦「ワリャーグ」に対する顕彰活動が繰り返し行なわれ、日本海海戦に参加した巡洋艦「オーロラ」も保存されている。(図15参照) この「オーロラ」は、かつてロシア革命の記念艦として保存・展示されていたが、現在ではそこに、日露戦争に対する記念活動が見られるようになった。そこで次章では、これら3隻を手がかりとしながら、軍艦にまつわる戦争の記憶が、日露双方の戦後の社会において如何に表象されてきたかを見たいと思う。

2. 記念艦「三笠」に見る日露戦争の表象

(1) 大正末期から昭和初期の「三笠」

日本海海戦の勝利を記念した記念艦「三笠」は、日露戦争直後に誕生したわけではない。記念艦は大正末期に完成し、昭和初期に脚光を浴びて多くの人々が観覧した「昭和の船」である。では、日露戦争が終ってから記念艦となるまで、「三笠」にはどのような歴史があるのか。まずは、「三笠」の現役時代の「後半生」から見たいと思う。

戦艦「三笠」と言えば、誰もが日本海海戦時の旗艦であった姿を思い浮かべるように、「三笠」の戦時中の姿が広く知られる一方で、日露戦争後の姿は、ほとんど知られることがない。それは、戦時中の「栄光の記憶」とは対照的に、戦後「栄光」とは無縁の道を歩んだためであろうか。「三笠」は、ポーツマス条約調印のわずか6日後の1905（明治38）年9月11日、佐世保港内において弾薬庫の火災により爆沈した。これは、日本海海戦の戦死者が8名であったのに対し、339名もの殉職者を出す大惨事であった。後に浮揚させて復帰したものの、ロシア革命に伴うシベリア出兵の支援として、ウラジオストック方面で沿岸警備活動中の1921（大正10）年9月、アスコルド海峡において座礁した。修理の後に舞鶴に帰港はしたが、これで「三笠」は軍艦としての役目を終えることになった。そして、同年11月には、ワシントン軍縮会議の廃棄艦リストに載り、横須賀で係留中の1923（大正12）年9月1日、関東大震災によって岸壁に衝突して浸水、9月20日に帝国軍艦籍から除籍された⁽¹²⁾。この結果、11月2日から翌1924（大正13）年2月7日までの間に、ワシントン軍縮条約に基づいて第1期廃棄処分工事が実施され、「三笠」から一切の兵装や各室の装飾・調度品の撤去が完了した⁽¹³⁾。

ところが、この解体中であった「三笠」が、一転して保存されることになったのである。この方針の転換には、一体どのような背景があったのだろうか。次に記念艦誕生の経緯について見たい。

「三笠」に対する保存運動は、解体工事開始以前に始まっているが、自然発生的に国民の間から保存を望む声が湧き上がってきたわけではない。それは海軍砲術学校長であった海軍少将樺山可也の意を受けた、『ジャパントイムズ』主筆の芝染太郎が中心となって、同紙上で展開された一大キャンペーンによって始まったものである。芝はまず、1923（大正12）年6月13日「国民其の艦を忘れて可ならんや、三笠を救え」と題する論説を同紙に掲載した。後にそれを訳したものが、以下のように紹介されている。

「おお、健忘なる国民よ！嘗て日本国民が此の勇ましい艦に対して懐いて居た敬意は何処へ行ったのか？三笠が日本海海戦に大捷した時、国民は挙って欣喜雀躍した。然るに今や其の艦は、老朽用に堪えざるが故に、また今日幸に平和であるが故に、忘れられて居る。斯く其の英雄を忘れ易き国民は、古き勇者を崇敬する精神を失ったことにより、自身亦計り知られぬ『忘却』の深淵に沈み果つべき運命から果たして救われるであらうか。我が国民の間から何故『三笠』を救えの声が出ないのであるか。此の甲板上で功名を立てた諸提督、諸艦長及び乗員等は、彼等の下に国家の興廃を賭した戦に勇戦奮闘した艦を思い出さぬのであるか。又山河を失うて奴隷と為るべき身を救うた日本海海戦の大捷を祝賀した国民の此の健忘は何としたことであるか！遠き英本国より『ヴィクトリー』を救えの声が仄かに聞え来る此の際、願わくは我が国民よ三笠を回想せよ」⁽¹⁴⁾。

芝によれば、日露戦争から18年を経た「平和」な時代において、「三笠」の記憶は「英雄を忘れ易き国民」によって忘却され、その戦争の記憶の風化を芝は嘆いている。これに対して、日本全国の新聞が、芝の論説を

転載し支持を表明したとされるが、それだけでは廃棄処分工事を止めることは出来なかった。

そこで芝は、1924（大正13）年3月18日、米国で教育を受けた人々による「日米倶楽部」の代表者と共に、帝国ホテル内の米国大使館事務所に「大使サイラス・イー・ウツツ」を訪ねて、「三笠」保存に尽力してもらえよう要請した。そのときの様子が、物語風に次のように描かれている。

「『閣下、日本の米よりも寧ろ米国のパンの方を多く食べた私は、今日閣下を日本人間に最も人望ある三米国人の一人にするために訪問したのです。日本人はペルリとタウンセント・ハリスの二人を有して居るが、二人では都合が悪いから三人にしたい。而して閣下を此の三人目の人としたいというのが此の私の願であるのです』と、斯ういう風に言うと、大使はいとも打ち解けて、『それは一体どうすれば宜いのですか、遠慮なく言って下さい』と来た。思う壺と計りに芝氏は、日本国民が三笠を愛し『ヴィクトリー』や『コンスチチューション』の様に記念艦として之を保存したく考えて居ること、軍縮条約に縛られて之を言い出しかねて居ること等を説明し、『此の際若し閣下の御尽力で最初の堅氷が砕かれ、米国政府の諒解が皮切りとなって各調印国の賛成が得られることに為るならば、日本国民は永久に閣下を徳としスリー・モースト・ポピュラー・アメリカンズの一人として閣下を敬愛するであろう』と結んだのである。茲に大使は初めて事情を了解し、『それは誠に当然な希望で、予個人としては毫も其の不可なる所以を見出さぬ。で一個人ウツツとして、及ばずながら之れに就いて本国政府を説得することをお約束します』と快諾を与え、芝氏等と固い握手を交わしたのである。之は実に『セーブ・ザ・ミカサ』運動に取り最初にして且最有力なる光明であった」⁽¹⁵⁾。

このように、「三笠」の保存を実現出来たのは、マスコミの力に負うと

ころが大きく、アメリカ留学の経験を持つ人々が橋渡しとなって、ワシントン軍縮会議の主催国であったアメリカに対する働きかけが行なわれ、その支持が得られたことが決定的となった。この結果、再び就航できないかたちで保存することを条件に、軍縮会議参加各国から「三笠」の保存が承認され、1925（大正14）年、「三笠」を記念艦として保存することが閣議で決まり、横須賀において保存工事が始まると共に、東郷平八郎元帥を名誉会長とする三笠保存会が発足したのである。

三笠保存会の会則第1条には、「本会ハ日露戦役当時ノ我連合艦隊ノ旗艦トシテ偉勲ヲ奏シタル軍艦三笠ヲ『ワシントン』海軍条約ノ規定及精神ニ違反セザル範囲ニ於テ之ヲ国民的記念品トシテ保存シ其ノ歴史的価値ヲ永ク国民ニ印象セシメ国民精神ヲ養フヲ以テ目的トス」とされ、「三笠」は「国民的記念品」であって、「国民精神ヲ養フ」ことを目的に保存することが明記され、そのための事業として、第4条には、「一、三笠保存ニ必要ナル施設ヲナシ且其ノ維持方法ヲ講ズルコト 二、三笠ニ於ケル東郷大将其ノ他将士ノ歴史的記念資料ノ蒐集 三、三笠ヲ学生生徒其ノ他汎ク公衆ニ観覧セシメ又ハ之ヲ公共的ニ利用セシムルコト 四、其ノ他本会ノ目的ヲ達スルニ必要ナル事業」の4つが掲げられた⁽¹⁶⁾。

翌1926年（大正15年）、保存工事は完了し、11月12日、記念艦「三笠」保存記念式典が行なわれた。その様子は、翌日の『神奈川新聞』に「不朽にのこる戦勝の記念三笠艦 きのう摂政殿下の台臨を仰ぎ華々しく厳かに記念式挙行」と題されて紹介され、東郷元帥が「三笠」艦上に皇太子（昭和天皇）を迎えて記念式典が挙行された。（図7参照）

この記念艦となった「三笠」は、昭和初期の学童の遠足の定番であったとされるが⁽¹⁷⁾、1929（昭和4）年度の「公開実物教育機関」の入館者数を比べると、東京では恩賜上野動物園（122万人）、靖国神社境内に設けられ

た軍事博物館である遊就館（30万8340人），東京帝室博物館（20万6225人）が上位3館であるのに対して，神奈川県では花月園（33万1394人）に次いで，記念艦「三笠」が19万8578人と，東京帝室博物館に匹敵する観覧者を集め⁽¹⁸⁾，記念艦「三笠」は博物館や動物園と同じ「教育機関」と位置付けられていたことが分かる。

そして，記念艦「三笠」は，博覧会の展示としても大々的に活用されている。それが，1930（昭和5）年に開かれた「日本海々戦25周年記念 海と空の博覧会」である。（図8参照）この「海と空の博覧会」は，総裁に伏見宮，名誉顧問に東郷元帥を迎えて，三笠保存会と日本工業協会によって主催され，3月20日から5月31日まで，第1会場の上野公園と，第2会場の横須賀に分かれて開催された。この第2会場となった横須賀へは42万540人が訪れ，このうちの39万4627人が「三笠」の展示に足を運んでおり⁽¹⁹⁾，会期中の73日間で前年の2倍近くの観覧者が記念艦を訪れた計算になる。

そこで，この博覧会が開催された趣旨を『日本海々戦二十五周年記念 海と空の博覧会報告』に見ると，「其趣旨トスル処ハ海事航空事業ノ発達ノ跡ヲ展示シテ海ト空トニ関スル知識ノ普及並ニ発達ヲ図リ二十五年前朝野ヲ一貫セル真摯ナル精神ヲ追憶シテ国民思想ヲ作興シ併セテ産業貿易ヲ振作シ欧州大戦ノ結果ニヨリ少カラザル変動ヲ来セル我現下ノ思想界及経済界ノ善導匡救ニ資シ以テ皇国未曾有ノ大戦ヲ記念セントスルニアリ」⁽²⁰⁾と掲げられ，さらに「今ヤ『皇国ノ興廢此ノ一戦ニ在リ各員一層奮勵努力セヨ』ト旗艦三笠檣頭一連ノ彩旗ヲ潮風ニ翻シテ日本海ニ乾坤一擲ノ大勝ヲ博シ我国ヲシテ一躍世界五大強国ノ一ニ列セシメテヨリ年ヲ閲スル事二十五回ニ及ヘリ。（中略）今動モスレバ欧米ノ思想ヲ謬取シ漸ク輕佻浮薄ニ赴カントスル際質実剛健ノ氣風ヲ涵養セントスルモノ又所以ナキニアラサ

ルヲ信ス。(中略)顧ミレハ二十五年前日本海大勝ノ報一タヒ発セラルルヤ国民拳ツテ之ヲ狂喜シ上下悉ク国民ノ悠久ヲ祝福セリ。蓋シ之レ洵ニ邦国ヲ思フ国民赤誠ノ発露ニシテ復タ国民総意ノ表徴タラスンハアラス。方今較々モスレハ思想質実ヲ缺キ架空妄想ニ赴カントス。是レ又吾人ノ大戦ヲ追想シ当年緊張ノ気分ヲ思ヒ邦国ヲ思フノ赤誠ヲ新ニスル」必要があり、「日本海海戦二十五周年記念事業トシテ当年ノ挙国一致ノ精神ヲ喚起シ民心ノ刷興ヲ図ルニハ博覧会ノ開設コソ尤モ其ノ当ヲ得タルモノ」⁽²¹⁾とした、と説明されている。

この中で、「欧州大戦ノ結果ニヨリ少カラザル変動ヲ来セル我現下ノ思想界及経済界」とは、第一次世界大戦に伴うヨーロッパにおける社会秩序の大変動、すなわちロシア革命によるロマノフ王朝の滅亡、オーストリアのハプスブルグ王朝、ドイツ王朝、トルコのオスマン王朝の相次ぐ崩壊が、日本でも国家体制の維持に対する社会的な不安を抱かせ、それに加えて第一次世界大戦時の好景気が去った後、1923(大正12)年の関東大震災と1927(昭和2)年の金融恐慌に続いて、1930(昭和5)年の金解禁に向けてとられた政府の緊縮政策が深刻な経済危機をもたらし、労働運動、小作争議の嵐が吹き荒れる中で、「軽佻浮薄」な「エロ・グロ・ナンセンス」の流行が見られるなど⁽²²⁾、当時の不安定な社会・経済状況を反映し、これに対して「日本海ニ乾坤一擲ノ大勝ヲ博シ我国ヲシテ一躍世界五大強国ノ一ニ列セシメ」た日露戦争の記憶を呼び覚ますことで、「国民赤誠ノ発露」や「挙国一致ノ精神ヲ喚起」することが期待されたと言えよう。

さらに、「海と空の博覧会」での展示や実演について見ると、第1会場では、「海軍館」が建てられ、不忍池において「軍艦無線操縦(毎日三回)魚雷発射実演(毎日四回)水中爆発(毎日四回)カタパルト(十時より)潜水艦襲撃実演(八時より)」⁽²³⁾が行なわれていたことが分かる。これに対

し、第2会場では、記念艦「三笠」の展示と共に、記念艦前に「三笠館」が建てられ、少し離れて「海軍館」もあった。(図9・10・11参照)

また、博覧会開催中の「海軍記念日」である5月27日には、東京市内で「模擬軍艦陸上観艦式及艦隊運行」が博覧会主催で行なわれ、「海軍記念日ヲ祝スル為メ」に「日本海海戦二十五周年ヲ記念シ一般国民ニ海軍思想普及並ニ当時ヲ追憶セシムルヲ主ナル目的」として、「三笠」をはじめ19隻の模擬軍艦(トラック)の陸上観艦式を日比谷公園で行なった後、上野公園の博覧会会場正門までパレードを行なっている⁽²⁴⁾。(図12参照)

この他にも、次のような「日本海海戦記念歌」が作られて、「世界に轟く日本海海戦の「大勝利」が高らかに歌われた⁽²⁵⁾。

- 「一、日本の国は海の国 日本男児は海を占む 山なす浪を乗り越えて
海の上なる大勝利 『皇国興廃彼の一举 今なお世界に轟けり』
- 二、日本の国は海の国 日本男児は忠を知る 忠でかためた拳には
鉄の艦をも粉微塵 『皇国興廃彼の一举 今なお世界に轟けり』
- 三、日本の国は海の国 日本男児は義に勇む 横に車のくせ者は
膺って凝らすに容赦なし 『皇国興廃彼の一举 今なお世界に轟けり』」

これに対して、「海と空の博覧会」を観覧した人々は、どのような印象を持ったであろうか。その手がかりとなるのが、4月10・11日に行なわれた「日本新聞協会招待会」に出席した新聞関係者の感想である。この「招待会」とは、「日本新聞協会第十五回大会ヲ東京ニ開催サルルヲ好期トシ四月十日全会員三百名ヲ上野精養軒ニ招待シテ本会場内ヲ観覧セシメ翌十一日ハ海軍省ノ好意ニヨリ芝浦埠頭ニ回航セル軍艦厳島ニ便乗横須賀ニ案内シ第二会場ヲ観覧セシメタ⁽²⁶⁾」ものであり、招待者の一人、名古屋新聞主幹與良三郎は、2日目に軍艦「厳島」に乗船して横須賀の第2会場を訪れ

る際に、新聞協会を代表して次のように謝辞を述べた。「私共はこの博覧会を拝見致しましてそぞろに、二十五年前の事を偲ぶ事が出来ました。之を事々しく申す必要は御座いません。各自の胸の中に当時の事がアリアリと浮んで参りました。今日は更に第二会場に赴き、その途中海軍最鋭の新兵器を以って、演習を見せて下さるとの事で誠に感謝に堪えぬ次第で御座います。現時の行詰まれる我国の情態を打開して、国運を発展せしむるには、海外至る処に日本村を建設し、之を日本とつなぎ合せる事を必要とするのであります。此の難局打開の方法としては、日本村を海外に扶殖する以外にはないのであります。而して之を実現する為には一に海軍の力に依る外はないのであります。我等新聞人は日本人をして海外に殖民せしめ、之を鼓舞激励する重大なる役目を有するものであります。此重大なる事業を遂行する為には我等の胸に燃す燃料がなければならぬのであります。今日は此の燃料を得る絶好の機会を得たと思ひます」⁽²⁷⁾。

そして横須賀への途上、「海軍演習見物」として「飛行機ノ襲来」と「潜水艦ノ襲来」が新聞記者の前で繰り広げられ、第2会場を観覧した後に行なわれた横須賀鎮守府司令長官主催の晩餐会席上において、光永新聞協会理事長は、次のように謝辞を述べて「大ニ海軍ヲ賞賛」したとされる。「昨日は上野の海と空の博覧会を親しく見学の機会を与えられ、又本日は海軍当局の別段の好意により軍艦上、最も進歩せる海軍現勢による各種の演習を拝見する機会を与えられたので、我々一同感銘措からざる次第である。自分は我海軍の偉大なる進歩に驚歎した。時恰も日本海海戦二十五周年に相当する。昨日我々新聞通信業者は、上野の第一会場を拝見し、目の辺り当時を追想した。(中略)併して本日第二会場を親しく拝見して海と空博の目的に今一項の加わっている事を知った。それは海の軍事思想の普及である。唯今司令長官は海軍と世の中が疎遠している事を云われたが、第二

会場により、その点は完全に除かれているのである。第二会場の催は、兵員の手になったものであるとの事であるが非常な努力が注がれて居り、如何に兵員の教育が行きとどいているかを察知し得るに充分で海軍の進歩を如実に物語っている⁽²⁸⁾。

與良は「現時の行詰まれる我国の情態を打開して、国運を發展せしむる」ためには、「日本村を海外に扶殖する以外にはない」、「之を實現する為には一に海軍の力に依る外はない」という感想を抱き、光永は「海の軍事思想の普及」を実感するなど、博覧会は観覧者に対し、海軍の存在意義を強く印象付けるものであった。

このように、「海と空の博覧会」において軍事色が強く打ち出された背景を知るには、同時期に開催されていたロンドン軍縮会議に注目する必要がある。4月22日、同会議で調印されたロンドン軍縮条約では、日・米・英3国間で補助艦の比率が決定され、日本は対米6.97割となったことが、「対米7割死守」を唱えた東郷平八郎をはじめとする海軍首脳を激怒させ、国会においてこの軍縮条約を巡って紛糾し、4月25日には衆議院で統帥権干犯問題にまで発展、後に浜口首相狙撃事件へと連鎖する。この政治的混乱の結果、海軍内の条約反対論者は、ロンドン軍縮条約を受け入れる代償に、主力艦や補助艦に代わる軍備拡充のための予算を獲得し、これ以降軍事費が止めどもなく増加して、4年後には国家予算の40パーセントを超過するまでに膨れ上がった。この出発点となった1930（昭和5）年は、軍事史に詳しい防衛大学校の田中宏巳が指摘する「軍縮を原因とする軍備拡張のはじまり」⁽²⁹⁾の年であり、博覧会場での「三笠」は、軍備拡充を訴えるシンボリック的存在であったと言える。

その一方で、「海と空の博覧会」に多くの観覧者が足を運び、人気を博した背景には、ちょうど日露戦争で活躍した世代が社会の第一線を退き、

戦時を回顧する時代に差しかかって、「日露戦争ブーム」とでも呼ぶ現象が見られたことが挙げられる。田中によれば、「二十五周年の昭和四、五年から三十周年の九、十年頃まで、途中満州事変が起ったこともあって、日露戦争ブームは容易に衰えなかった。重苦しい社会情勢の打破を願う国民と、マスコミが企画した日露戦争勝利二十五周年、三十周年の記念事業とが結びつき、日露戦争を題材としたパノラマ展示、記念式典のほか、新聞紙上の座談会や特集記事、雑誌の特集号、記念出版などは、いずれも非常な人気となった。戦争で活躍した軍人も、各地の軍隊や在郷軍人会らが主催する講演会に引っ張りだこで、苦しかった先頭の様子や日本軍の勇敢な戦いぶりを拳に力を込めて懸命に語った。日露戦争への回顧が促進され、先人が血と汗で取った満州を手放してはならないといった檄文が珍しくない時代であった」⁽³⁰⁾とされる。

日露戦争を回顧する意識が高まる中、1931（昭和6）年の満州事変を経て、軍国主義を加速させる軍部は、「四分の一世紀前の血戦に憤起せよ」、「過去の国難を顧みて将来の国難に想到す」⁽³¹⁾といったスローガンを掲げ、日露戦争をテコに昭和の難局を乗り切ろうとした。これについて田中は、「日露戦争が単なる歴史の一事件という範囲を越え、軍国主義化の精神的支柱になっていった事実を見逃すわけにはいかない。換言すれば、日露戦争への回帰運動と昭和の軍国主義化の動きとは、相互に刺激し合う関係にあったということであり、日露戦争は昭和の時代が要求するニーズによって、改めて注目されるようになった」と分析している⁽³²⁾。

そして、日露戦争の神話化が始まる。「特に二十五周年に当る昭和五年以降、日露戦争を題材にした出版物、芝居、映画等が多数できた。こうした作品の多くは、国民に自信を与え、士気を鼓舞しようとする余り、ともすると、『良いことづくめ』に終始しがちになり、いわば民族の精神的支

柱である神話と同じ役割を果たす日露戦争を作り上げていった」が、それは「肝心の日露戦史が秘密にされ、事実を明らかにするのが困難であったために、『良いことづくめ』になるのは避けがたく、そうなるとう勝利が誇張され、神がかり的理由がそこに付されて、神話化せざるをえなかったという事情があった」⁽³³⁾と田中が述べるように、やがて忠君愛国的な日露戦争の記憶が、堰を切ったように語り出されていった。「三笠」もまた、そうした風潮と無縁ではなかったのである。

東郷平八郎が没した1934(昭和9)年には、早くも『聖将 東郷平八郎』が出版されて⁽³⁴⁾、東郷平八郎の神格化が始まり、これに続けて日本海海戦30周年に当る1935(昭和10)年には、『聖将東郷と霊艦三笠』が、三笠保存会によって記念出版され⁽³⁵⁾、記念艦「三笠」は「霊艦」と呼ばれる存在となった。

この『聖将東郷と霊艦三笠』を見ると、「三笠の仕事其のものは、東郷元帥在世中からして既に元帥を記念する事業という半面を有して居た」⁽³⁶⁾とされ、記念艦「三笠」は、東郷個人の顕彰と密接に関係しながら、「日露の海上作戦を口にする者、必ず『東郷大将と三笠』を言う。それ程東郷元帥と戦艦三笠とは不可分の因縁があるのである。連合艦隊旗艦として東郷司令長官の旗章を其の大檣頂に掲げた戦艦三笠！それは実に我が海の護りの牙城であり、熟慮断行尽忠報国の象徴であり、之を仰ぐ者をして感奮興起、一意本分の遂行に邁進せしめたのである。さるにても櫛風沐雨一年有半、戦あれば即ち味方の先頭に立ちて其の攻撃の最大難衝に当たりながら、些かの蹉跌もなく終始其の任務を遂行し、以て司令長官の作戦指揮に遺憾なからしめた三笠こそは、天晴武運目出度き護国の御楯と申すべく、日露戦争中其の甲板上に勇戦奮闘した将士の英霊、今尚宿りますかと仰がれる霊艦である」⁽³⁷⁾とされて、「三笠」は「尽忠報国の象徴」・「護国の御楯」

と見なされ、「英霊」が宿る「霊艦」となり、「されば東郷元帥の老艦三笠を遇せられること宛然生ある歴戦の勇士を見るが如く、或は旧友忠僕に接するが如く、親愛の限を示された。従って元帥は、三笠の廃棄を最も悲み、其の記念艦として更生せることを最も慶賀し、其の幾久しく老體を保存して重大なる使命を果さんことを最も熱烈に祝福されたのである」⁽³⁸⁾と、「三笠」の「重大なる使命」を強調する。

その「重大なる使命」とは、「近時我が同胞ややもすれば、即ち非常時を口にし国難来を説くが、今を去る三十年の日露戦争こそは、実に蒙古来にも比すべき一大国難であった。されば上御一人の御軫念は申すも畏き極みで、これを拝承した国民一同は、軍人なると然らざるとに論なく、ひたすら感奮興起し、挙国一致難局に処し、強虜を膺懲して、国家を泰山の安きに置き、東洋の天地に平和を克復して、上は万乗の君を安んじ奉り、下は蒼生をして其の堵に安んぜしめんと、悲壮なる尽忠報国の決心をしたのである。是ぞ実に、君民同心挙国一致の極地と申すべく、此の一致と決心とを以て、戦われた正義の戦争が、結局、我が皇国の大勝利に帰したのは、固より当然であった」⁽³⁹⁾と、現在の「国難」にあたって、過去の「国難」であった日露戦争を思い出させ、「尽忠報国の決心」と「君民同心挙国一致」とを喚起する、というものであった。

また、当時の記念艦には、「(一) 日本海海戦に於ける軍艦三笠弾痕図 (二) バルチック艦隊来東航跡図 (三) 日本海海戦行動航跡図 (四) 日露軍艦在失比較 (五) 世界全面図」の5図が展示されており、これについて『聖将東郷と霊艦三笠』の解説では、「(一) を見ては本艦の苦戦を偲び、(二) を見ては海路一萬六千余里を蹴破して遙に来東した敵艦隊の末路に一掬の涙を注ぎ、(三) を見ては我が艦隊の大胆且巧妙なる運動を嘆賞し、(四) を見ては空前の大捷に勇躍を禁じ得ず、最後の世界全面図を見ては

此の海戦が我が国を一躍一等国の伍伴に入らしめたことを感激を以て回想するのである」⁽⁴⁰⁾と案内し、「此の海戦が我が国を一躍一等国の伍伴に入らしめた」という日本海海戦の「栄光」の記憶を、改めて喚起しようとしている。

こうして、記念艦「三笠」は日露戦争の「栄光」を称える役割を果たしながら、同時にその主とも言うべき東郷平八郎を顕彰し続け、日本海海戦35周年と皇紀2600年とが重なった1940（昭和15）年には、遂に東郷平八郎が、神として東郷神社に祀られることになった⁽⁴¹⁾。そして、東郷神社と並ぶ「聖地」となった記念艦「三笠」には、1941（昭和16）年までの16年間に、実に539万人もの見学者が訪れたのである⁽⁴²⁾。

このように、昭和初期においては、新たなアジア・太平洋戦争の開始と拡大という状況下で、過去の日露戦争の記憶が繰り返し呼び起こされて、「尽忠報国」の精神の根拠となり、その「栄光」の記憶が戦争を遂行するために活用され、この結果、軍縮時代の産物であった記念艦「三笠」が、軍国主義を象徴するシンボリック的存在となって注目を集め、戦意高揚に大きく貢献することになったと言えよう。

(2) 敗戦後の「三笠」

軍国主義の時代に注目を集めた記念艦「三笠」は、敗戦後、その立場を一転させた。1947（昭和22）年7月29日付『神奈川新聞』には、「哀れ記念艦の末路」と題する次の記事が掲載されている。「敗戦の結果浮び上がるもの、まっ殺されるもの、この二つの運命はあながち人間社会や銅像の世界ばかりではない。その審判の日を静かに待っているものの一つに記念艦三笠がある。横須賀市白浜海岸に大正十四年以来コンクリートで固められた三笠は東郷元帥とともに軍国主義の生きたお手本として観覧者の数は日に数千を数えたものである。しかしいまや世界は一転した。横須賀の市民はこの軍国主義の殿堂だった三笠がどのような審判をうけるかについてすくなく興味をもっている。動ける艦船なら賠償物資として連合国に引渡されるという手もあるのだが、周囲をコンクリートで固められた三笠は足腰の立たない廃人同様である。だがこの廃人みtainな三笠も各方面から相当の秋波が向けられているから面白い。現在同艦は大蔵省所管となっているが某会社ではマスト、煙突を総て取除き臨海ナイト・クラブを作ってはという名案を出すかと思えば、将来この地の利を生かして海洋競技のクラブ・ハウスにしてはという比較的堅実な政策を秘しているなどなかなか興味深い。もっとも終戦のどさくさにまぎれて艦内にあった赤いジュータンや貴重品は誰かが勝手に処分したというから地下の東郷さんもさぞ苦笑したことであろう」。

ここからは、敗戦からまだ間もない当時、記念艦「三笠」が「軍国主義の生きたお手本」、「軍国主義の殿堂」と見なされ、「まっ殺される」かどうかの「審判」を待つ状態であったことが分かる。

この後、「三笠」は話題に上ることもなく、ほとんど忘れられた存在となっていたが、日本海海戦50周年に当たる1955（昭和30）年頃から、再び

注目を集め始めた。そのきっかけとなったのが、元海軍記者で『産経時事』主幹の伊藤正徳が、新聞紙上に「三笠」の荒廃する姿を訴えた、次の文章である。「いかに戦争に負けたとはいえ、戦後のその廃頽ぶりは悲惨そのものであった。東郷平八郎の部屋は、カフェー・トウゴーとなった。口紅あかく眦あおき半裸の商女が、怪しいハイ・ボールを酔客にひさいでいた。作戦室には麻雀の四卓が深更まで牌の騒音を流していた。士官室はダンスホールとなって、明治参拾八年五月二十七日に、そこで敵の十二インチ砲弾が炸裂し、六十余名の勇士が死傷した苦戦の思い出は、タンゴとかタップとかの靴の音にかき消されていた⁽⁴³⁾」。この、「三笠」が日本人の「廃頽」によって「悲惨そのもの」となったとする伊藤の主張は、大きな反響を呼んだらしい。

これに対して、戦前の三笠保存会の理事を務めた下村海南は、当時の「三笠」の現状を調査して、1956（昭和31）年に冊子にまとめ、それが翌年5月、旧海軍のOB会組織である財団法人水交会の機関誌『水交』に報告されている⁽⁴⁴⁾。

下村はこの中で、「私が近く三笠を見舞って調べた限りではそこに次のような事情があり、現在いかなる状態におかれてあるかが確かめられた」とし、その「事情」とは、「三笠記念艦は終戦と共に横須賀米海軍基地司令部の管理に移された。当時は永久平和の為好ましからざる記念物として廃棄論さえ起こったのであったが、元読売新聞社の事業部に関係ありし、時の橋本湘南振興株式会社社長は之を遺憾として、時の太田三郎市長を通じ、三笠艦の転用許可を申請し、一度却下されしがさらに熟願の結果、民生部長ヒギンス中佐、太田市長、橋本社長の間に協定がまとまり、二十三年一月二十九日付でデッカー司令官名にて、艦橋、煙突、マスト、砲塔は四月一日までに撤去することを条件とし、横須賀市長へ三笠の転用が許可

された。(中略) 猿島の観光を主にしていた湘南振興会社は、三笠艦の転用をうけて、軍事的施設の撤去改装を行い、水族館を中心とする海洋博物館としての文化的施設に切り替え約千坪の三笠艦と共に『みかさ園』の名のもとに児童遊園地向きとなり、大人二十円小児十円の入園料により経営に当たったが、全然又昔日の姿もなく、現状では無配当をつづけている外なき状態におかれてある」のであり、その「状態」とは、「三笠の残骸にはマストも煙突も砲塔も大砲もない。わずかに司令塔の骨が残されてある。二つの砲塔のあとはノッペラボーの真白なペンキ塗りの大きな円をえがき、心持ちカマボコ型になっている、マストも煙突もなくは格好がおかしい。上甲板は模様替して、小さいなりに水族館もできているが、誠に貧弱で見物人は吾等一行に止まり、生き残っているわずかな小魚が残っている。中央部には四、五百人ほど収容出来るホールがある。いろいろの催しに使うらしい。廻廊の側壁には軍事には一切ふれざる児童教育の参考資料、図表、絵解などが掛けられてある。(中略) 我等四人だけで艦上館内は、ヒソリカンとしている。『みかさ園』もところどころに売店とか木馬とか、スベリ台とか、メリーゴーランドとか、そうしたスポーツの設備などもあるが、何分にも手狭であり整っていない。いかにもさびれている」とし、「三笠艦でない『みかさ園』だから当時の思い出はなくなったといってよい」と評した上で、先述の伊藤の記述に見られるような「カフェー・トーゴー」の伝聞に対して、敗戦直後、「取り締まりもつかず、乱入者も多く、倉庫もこわされたという事であった」としながら、「三笠の艦上に米兵がダンスをしたという事はない。三笠艦がキャバレーになっていたという噂も立ったが、米軍には将校なり、下士以下のそれぞれにクラブはある。市中のキャバレーにも米兵は足を入れない。只市中に数多くの内地人向けのキャバレーは出来た。しかし、懐中のあたたかくない連中は入場料二十円

で『みかさ園』に入り、艦上で飲んだり歌ったりおどったらしい。或時そうした連中の中に乱闘もあった。警察の手が入って三笠艦上の事故であるというので、ニュースになる。そのうわさが高く広がったというのである。我等の親しく見たところでは、今、バアらしい設備も何もない。食卓も麻雀台もない」と、「カフェー」や「キャバレー」となった「三笠」を否定する。結局のところ、湘南振興会社は「良心的に経営」して来たが、「三笠」が老廃して入園者も減り、その維持費の捻出が困難な状況が続いていると、下村は報告するのである。

では、何ゆえ記念艦「三笠」は、児童遊園地「みかさ園」になったのか。東京大学の木下直之は、連合軍総司令部（GHQ）の意向に沿って1946（昭和21）年11月1日に出された、内務次官と文部次官共同の通達「広葬等について」の中の、「公共の建造物及び其の構内又は公共用地に存在するもので、明白に軍国主義的、又は極端なる国家主義的思想の宣伝鼓舞を目的とするものは撤去すること」を挙げ、靖国神社の戦争博物館であった「遊就館」の敗戦後の再建策においても、同年のGHQ宗教部長と靖国神社権宮司との会談の中で、「遊就館は神社の附属物である。将来は内容を全然変えて娯楽場（ローラースケート・ピンポン・メリーゴーランド等）及映画場にしたいと思っている」という構想があったことを明らかにしながら、記念艦「三笠」についても、同様に「生き延びるための方策」が採られたと考えるべきであり、「船体だけでも残ったことをよしとしなければならない。そうした考えは、保存に奔走した関係者たちの胸にあったはずである」と指摘する⁽⁴⁵⁾。

このように、下村が報告する「水族館を中心とする海洋博物館としての文化的施設」、「児童遊園地」への「三笠」の転用とは、存在意義を失った記念艦「三笠」の「生き延びるための方策」と考えられよう。なぜなら、

敗戦という厳しい現実直面する人々にとって、過去の戦勝の記憶は何ら意味を持つものではなく、また、戦前同様に「尽忠報国の決心」を想起させる記念物は、当時の人々が記憶の中から、消し去りたい存在であったと考えられるからである。

実際、東京の万世橋前に建立されていた、日露戦争の「軍神」広瀬中佐の銅像は、1947（昭和22）年6月28日に出された「東京都公報第186号」において「この銅像は、軍人の殉忠の士気を記念するものであるが国民の戦意昂揚を強調し敵愾心を鼓舞するものとも考えられるから撤去する」とされ、撤去工事が同年7月23日に都土木課の手により行われて銅像が引き倒されており、また「東郷坂記念碑」ですら、同公報によって「この碑は、東郷元帥の凱旋を記念するものであり、且つ砲弾型であるから撤去する」とされるような状況の中で、記念艦「三笠」が廃棄されてもおかしくない状況であったことは想像に難くない⁽⁴⁶⁾。

そして、この児童遊園地「みかさ園」は、娯楽の少ない時代、それなりに賑わっていた様子が窺える。1954（昭和29）年8月付の『神奈川新聞』では、「記念艦三笠に人気再来 猿島はサル景気でホクホク」という記事が学童の写真と共に連載され、「連日各地から見学にくり出してくる学童たちの団体客でにぎわっている」、「対岸の猿島に十頭放した台湾産の尾長サルが人気を呼び、三笠園前から出る二隻の連絡線は連日満員の盛況」と、子どもたちの遠足で賑わう様子が記され、先に「カフェー・トゥゴー」に触れた伊藤自身も、1956（昭和31）年5月5日、小学生の孫を伴って「みかさ園」を訪問し、その時の様子を「『三笠』遊園地は某新聞社主催の臨時動物園デーというので賑わっていた。艦の中央部の煙突を取りはらって、映画館兼ダンスホールにしたカマボコ型のホールには、三百人ほどの観客が映画の開始を待っていた。艦橋に立って眺むれば、そこに軍

艦らしいものはなにもない。小学生の孫は、どうしても軍艦を納得しない。砲塔も大砲もなく映画館が占領している建造物は、少年にも軍艦とは思えないはずだ」と記している⁽⁴⁷⁾。そこには、「廃頹」した風俗営業の雰囲気は何ら感じられず、後に伊藤は、「『バー東郷』や『カフェー加藤』は風説だけであったようだが」と、言葉を濁して前言を否定しており⁽⁴⁸⁾、下村の報告を裏付ける形になっている。

しかし、伊藤にとって、児童遊園地「みかさ園」の光景は、「亡国の姿を見る思い」を抱かせるに十分であり、日本の「廃頹」を訴えるためには、「カフェー」や「ダンスホール」の「惨状」を、あたかも眼前の光景として描かざるを得なかったのかもしれない。それに加えて、「この有様を見て悲しみの眼をおおうたのは、日本人ではなくてイギリス人」の貿易商「ジョン・ルービン君」であったことを強調して、伊藤は「日本人の恥」を喚起するのである。

この「ジョン・ルービン君」とは、「『三笠』が英国で造られているとき、出入りの時計商として『三笠』の回航員と親しくなり、『三笠』に愛着を持つようになった」人物であり、1955（昭和30）年秋、「商用があって、七十五歳の老軀も若々しく、日本の土を踏んだ」が、横須賀の「三笠」を訪ね、その現状に接して、「憤然、踵を蹴って帰り、ただちに一書を日本タイムズ紙に寄せて、日本人の愛国心に質疑」して、「日本人は『三笠』の現状を知っているのだろうか。おそらく知らないのであろう。知っていれば、あの国辱的荒廃を放っておけるはずはないと思うからだ」と、同年10月の『ジャパントイムズ』紙で、最初に「三笠」の保全を訴えた人物とされる⁽⁴⁹⁾。

大正末に、廃艦となった「三笠」の保存を最初に世論に訴えたのも同紙であり、英字紙でありながら、二度までも「三笠」保存に大きな影響を与

えたとされる点には驚かされる。反対に、対外的な視線を意識することが、「日本人の誇り／恥」を喚起させ、保存に向けての契機となったと言うべきであろうか。

当時の回想として、東郷会理事の佐野純雄が、当時の「三笠」の荒廃に対し、「このとき日本人の一般は、自分が生きることによって精一杯で『三笠』のことまで、かかり合っている余裕などなかったというのが、いつわらぬ状態であったとあってよいであろう。みじめといえば、みじめであったが、どうしようもなかった」と述べ、「荒廃という言葉」はその頃の「日本人の精神状態にも与えられる形容であったとあってよいだろう」とした上で、「これがかつて気概をもって国を興し、大国ロシアに打勝ち、世界の列強に伍した、誇り高い国民であったのだろうか、われとわが目を疑うのである。国民の持つ誇りとは、かくもはかなく、むなしなものなのだろうか。君子は豹変するというのが、その豹変はすさまじかった。伊藤氏の『日本人の恥を知った』という自嘲は、このような魂を失った日本人に対する痛嘆であろう。残念なことではあるけれども、これもわれわれ日本人がたどった歴史の一コマであったことは間違いない」と感想を述べている⁽⁵⁰⁾。

現在でも、敗戦後の「三笠」の荒廃について説明された文章中に、「カフェー東郷」や「ダンスホール」のエピソードが繰り返し引用されているのを目にする時、敗戦後の日本の「悲惨」な社会状況を「三笠」に反映させ、それを「日本人の恥」と見る人々の多さには驚かされる⁽⁵¹⁾。そして、敗戦から10年を経て、再び「軍艦」に「国家の威信」を感じる意識が戻った人々にとって、当時の「三笠」の状況が、まさに忌むべき敗戦の記憶を表象すると感じられたがゆえに、「戦勝＝栄光の記憶」の復活、すなわち「敗戦＝悲惨な記憶」の払拭が求められたと言えよう。奇しくも「三笠」は、新旧の二つの戦争の記憶が交差する場となったのである。

それゆえ、「日本人の誇り」を取り戻すことを掲げて、先述の伊藤は、「昭和二十年、いったん戦さ敗れるや五月二十七日も、東郷も、旗艦『三笠』も、いっきょに消えてしまった。これは、まことに嘆かわしい国民の取り乱し方である。敗戦も歴史であるが、大戦勝も歴史である。しかも、おそらくは国民最大のプライドに値する歴史である。それをみずから焼却してしまうのは、独立国民の独立の意識と相容れない卑下敗退の思潮にあるものと思われる。正さねばならない」と、「三笠」の復活に向けて奔走していく⁽⁵²⁾。

その際、伊藤は、イギリスでは「トラファルガル海戦が、イギリス人の不滅の記憶であるのと併行して、英政府はヴィクトリー号を永久に保全することを志し、それをポーツマス軍港につないで、国民の参観に供すること一世紀半におよぶ」し、アメリカでも「祖国の光荣ある歴史を、軍艦につないで保全する思想が生きている。ポーツマス軍港に保存される軍艦コンスチューション号がそれである」と、英米の保存艦2隻を引き合いにして、「日本の独立を防衛した、人と時と艦とを、人々はもう少し記憶してよかろう」と、「三笠」の保全を訴えた⁽⁵³⁾。ここに「独立を防衛」した艦という、「興廃」の「廃」を強く意識した「三笠」の新たな意味付けが登場したことは注目に値する。

しかし、保存の具体的方法をめぐっては、当時様々な意見が存在した。1955（昭和30）年10月12日付『毎日新聞』夕刊では、「軍艦『三笠』残せ、こわせと二つの動き」と題する次の記事が掲載されている。「日本海海戦で東郷元帥が乗った旗艦三笠は横須賀港にコンクリートで固められたまま戦後荒れるにまかされていたが、最近旧海軍士官を中心としたグループが『由緒ある艦を重要文化財にしよう』という運動を起し、これに対して『ぶざまな残がいを見るにしのびないからスクラップにして新に三笠を

記念する建物を建てろ』という声も起こり戦後十年見捨てられていた三笠がいま横須賀の話題をさらっている」。また、文化財保護委員の話として「正式な話は聞いていないが、三笠の重要文化財指定は困難があると思う。軍艦としての構造がどの程度認められるかに疑問があると思う」と否定的見解を示している。(図13参照)

ところがそこに、転機が訪れた。それは、戦勝国アメリカの海軍元帥であるニミッツ提督から差し伸べられた「援助」である。『文芸春秋』1958(昭和33)年2月号に、ニミッツは次のような文章を投稿した⁽⁵⁴⁾。「私が『ミカサ』を訪れたのは、一九四五年(昭和二十年)九月一日ごろで、ミゾリー艦上での降伏文書調印の一、二日前であった。その時のミカサは艦底がコンクリートで固められ、日本帝国海軍の東郷元帥をしのぶ神社であったが、それだけではなく国民の記念物でもあった。同艦にいた管理人の話では、真鍮や銅の附属品は戦時中に全部取除かれたとのことだった。そのほかに、歴史的価値のある部分が、どさくさにまぎれに持ち去られた跡もみられた」とし、「東郷元帥を尊敬するものの一人として、この昔から有名な軍艦が、それ以上荒らされるべきでないと思い、私は米陸戦隊に命じて歩哨を立て、ミカサを破損したり、歴史的な物品を持ち去ることを防ぐことにした。この命令が実施されたと私は承知している」と、アメリカが「三笠」を荒廃させたわけではないことに触れた上で、「ミカサがいま悲しむべき状態にあるとは甚だ残念である。この有名な軍艦がダンスホールに使用されたとは嘆かわしい。この軍艦の全体か、さもないれば一部が日本の最も偉大な海軍軍人の一人をしのぶ記念物として保存されるべきだと思い、またそうなることを希望する。どういう処置をとれと差出がましいことはいえないが、日本国民と政府が、全世界の海軍軍人に賞讃され、尊敬されている提督の思い出を永らえるために、適切な方法を講ずること

を希望する」というものであった。

ニミッツが、「ダンスホール」に使用された「三笠」を嘆き、東郷元帥に対する「尊敬」の念を明らかにして、東郷を記念するために「三笠」の保存を望むという姿勢を示したことは、アメリカから「三笠」復活のための「お墨付き」を得たに等しく、これにより復活に向けての運動は大きく前進した。この後、アメリカ海軍は、スクラップにした艦艇を資金として寄付するなど、物心両面から「三笠」復元運動を援助し、また、ニミッツは東郷神社の復興まで協力している。

この、アメリカに後押しされた「日本の誇り」の回復という構図は、まさに当時の東西の冷戦を背景とした、アメリカが後援する日本の再軍備化という時代背景抜きには考えられないであろう。ニミッツの「三笠」に対する「援助」は、アメリカの国策と合致したがゆえに、容認され利用されたと言えるのではないだろうか。

それは次の『文芸春秋』に掲載された、「三笠」を巡って「国防の魂」を論じた伊藤の文章にも、色濃く反映されている。伊藤は、「日本がソ連を負かした不届至極の記念であるから、即刻これを破壊廃棄すべし」とソ連が主張したせいで、「三笠」のマスト、砲塔、煙突、艦橋が撤去され、「三笠」は「魂を抜いて形骸だけ」の保存を認められたが、「後にアメリカが惜しいことをしたと悟った時はモウ既に遅く、魂は抜けきって戻って来ない状態」となってしまう、これでは「日本の独立と同時に、共同防衛条約を結んで自由陣営防禦の一役を求め、武器を貸与し、自衛官（兵隊の新語）の増員を要望しても、一旦抜けた魂は容易に帰って来ない」のであり、「魂のない軍隊」は、「その精神力が復活しない限り、彼等は小さい内乱にもおびえるであろう」⁽⁵⁵⁾と、訴えるのである。

昭和初期において、記念艦「三笠」は「海と空の博覧会」で脚光を浴び、

国防意識を喚起して、日本は軍備拡充に邁進していったが、再度記念艦「三笠」の復活が叫ばれた独立後のこの時期もまた、国防意識が話題にされ、自衛隊という新たな軍事力を保持し始めることを考え合わせると、記念艦「三笠」は、繰り返し軍備を生み出す際の先導的役割を果たしている、と言えるかも知れない。

1957（昭和32）年、映画『明治天皇と日露大戦争』が公開されて、日本海海戦における「三笠」の活躍が描かれ、日本人の間で日露戦争や「三笠」をタブー視する風潮が弱まる中、1958（昭和33）年11月4日、丸之内日本工業倶楽部において、「三笠」の復元に向けた三笠保存会発起人会が開かれた。その際の元慶應義塾大学塾長・小泉信三のスピーチは、次のようなものであった。「日本国民の自重の精神は敗戦によって崩れました。他国の武力に屈するのやむなきに至りました日本人は、その国民としての誇りを失い、心の友を失って退廃に陥ったことは、ごらんの通りであります。すべての道徳的努力を無意味なものとしてあざけるという思想、ひたすらに官能の満足を追い求めるという傾向、またさらに、何ものかにこびるような気持から、しきりに日本及び日本人をあなどりあざける風潮が起きてきたことは御承知の通りであります。（中略）軍艦三笠の現状は、偏に自重を失った国民の精神状態を示すものと思います。自尊自重の精神を失った国民は、日本国民として忘れてはならない三笠を現在のような状態に陥るがままに陥らせ、また、国民にとってこれほど尊い記念物である三笠が今のような状態に放置されるという事実がさらにまた原因となって人心を一そうの頹廢に導くということになって現在に至ったのであります」と、先述の伊藤同様、日本人の「頹廢」と「三笠」の現状を重ね合わせ、続けて自身の日露戦争当時を回想して、「慶応の学生で十七の少年」だった当時、「ただ日々待ちたくないバルチック艦隊の近づくのを待つという気持

であった」，「日々が不安で，日々が苦しかったということを思い出します。そのあとに日本海海戦の勝利が報ぜられたのであります。いかにそれが国民に喜びというか，救われたという感じを与えたことは今日もなおはっきり思い出すことが出来ます」とし，「この地球上に国を立てておる一つの国民が国の危うきに臨んでその祖先のものでもあり，子孫のものでもある国土とその独立を守るために心身の力を尽し，そしてこのような大勝を博してそして自国の安泰を勝ち得た。国を存亡の危機において守り得たということは，これは忘れてはならぬと思います」と述べ，さらに「百年前には西欧強国の力が西から東に及んで，ついに日本に達したのでありますが，今日はアジア全体において東から西へ向かっての一種の押戻し運動が行われておる。それはアンチ・コロニアリズムとか，あるいはアジア国民主義という名前と呼ばれておりますが，とにかく百年前とは違った潮流が流れておる。この転換の原因は何かと言えは，結局アジア人の覚醒ということでありましょうが，この覚醒をうながしたものの数多くあるうちの日本の近代化と日本の勃興，ことにその端的に現れましたものは，日露戦争における，日本海海戦の勝利であったと言っているのではないか。そうしてみれば，日本海海戦，また，そのときの旗艦の三笠というものは，単に日本人にとって忘れてはならないものであるばかりでなく，世界の歴史を促す一つのファクターになっておる」と，世界史的意義を強調した上で，「三笠がどういう現状にあるのかということに思い及びますと私どもは実に堪えがたい気持がしたのであります。日本人として赤面するのみならず，日本を愛する外国人が赤面するであろうということで，また赤面するというような気持を抱いて今日に至ったのであります」と，ここでも伊藤が「ジョン・ルービン君」によって「日本人の恥」を知ったのと同様の理由から「三笠」の復元が必要と訴えるのである⁽⁵⁰⁾。

この中で、小泉も伊藤同様、「独立を守るために心身の力を尽し」、「国を存亡の危機において守り得た」という記憶を呼び覚ましているが、それは敗戦・占領という独立を喪失した体験を強く意識したものであったことが分かる。また、当時、自衛隊が発足し、「独立を守る」という大義のもとに再軍備化が進められていたこともあり、それは当時の社会状況を色濃く反映したものであったのではないだろうか。日本海海戦の記憶は、戦前においては主に「一等国」へと国を「興」した記憶が想起されたのとは対照的に、敗戦後では国が「廃」れることを防いだという記憶が想起されるのである。そして、国際社会への復帰の中で、新たに「アジア人の覚醒」という他者の記憶が登場し、「日本の勃興」が「アジア国民主義」に寄与したというレトリックに利用され始めたことも注目に値する。

このようにして、「三笠」の復元運動が開始されていったが、これに対して違和感を抱く人々も存在した。先に「国民の持つ誇りとは、かくもはかなく、むなしいものなのだろうか」と感慨した東郷会理事の佐野純雄は、「復元などしないで、戦後の惨状を、そのまま保存して記念したほうがより大きな意義を持つメモリアルになるという意見を述べた人があった。きれいな事だけがメモリアルでもあるまいという論旨である。逆説的であるが面白い」と記している⁽⁵⁷⁾。

60年安保が吹き荒れた翌1961（昭和36）年、遂に「三笠」は復元され、旧海軍記念日の5月27日、復元完成記念式典が行われた。その時の様子を翌日の『神奈川新聞』は次のように伝えている。「コナリー米海軍長官、ニミッツ元帥、バーク海軍作戦本部長らを代表して出席したケンプ・トリー少将は日本語で『東郷元帥をお慕いする。アメリカ人はきょうの三笠の復元を心から喜んでいきます』と話した。三笠の復元をまっさきに提唱して物心両面の援助を与えてくれたことで感謝されているニミッツ元帥のサイン

入りの天然色肖像写真を西村（防衛庁）長官に贈呈するよう頼まれたことを発表。このニミッツ元帥の額入り写真はすぐ三笠艦内の東郷元帥が起居した長官室に飾られた」。

また、同時期、記念艦「三笠」の周辺が、「三笠公園」として整備されたことも、「三笠」前に立つ記念碑によって分かる。そこには、公園の名の由来になった「三笠」について、「日本海々戦―一九〇五年―の際、わが連合艦隊旗艦として参戦し、時の司令長官東郷平八郎の大号令『皇国の興廃此の一戦に在り云々』と共に世界海戦史上不滅の名をとどめた」と刻まれている。

そして、1967（昭和42）年5月27日、この「三笠公園」に、東郷平八郎の銅像が建立され、序幕式が行なわれた。これを建立した、東郷司令長官銅像建設委員会は、高松宮を名誉顧問に、元海軍中将の今村信次郎を会長とし、石橋財団後援のもと全国から寄付が募られ、日本芸術院会員の清水多嘉示によって銅像が制作された。清水は、「東郷元帥の功績、偉勲を発顕高揚する標識としてのモニューマン（記念像）の制作を担当するの光栄を得たことは、至上の喜びであり感激に堪えない。私達の生活の中で端的に精神的要素となる記念碑は、それ自体が秩序あり統一ある立派な芸術作品でなくてはならない。高貴で、力強いこと、人間をして完璧と崇高なる秩序へ導入し豊かにする、公衆の広場に置かれる作品は特にこの要素が緊要である」と述べ、この記念碑が「元帥の功績、人格を顕彰する」と同時に、「文化の象徴」となり「精神の作興に寄与」することを祈念する、としている⁽⁵⁸⁾。戦前にも果せなかった銅像の建立が、ここに完成した。

さらに、1969（昭和44）年には、記念艦で撮影が行なわれた映画『日本海大海戦』が公開され、また、1971（昭和46）年5月13日付『神奈川新聞』では、「モテています明治ムード」、「『カッコいい』と若者 日曜

日には鈴なり」と題する記事の中で、記念艦の人気が高まってきていることが記されている。そこには、昭和44年度の入場者が23万人、昭和45年度の入場者20万7千人と報告され、これに対して三笠保存会の松下業務部長が「中学、高校など若い人がふえたが、これは一昨年あたりからで教科書に日本海海戦がはいったころと一致する。カッコいいと声あげたと思うと映画の説明に泣いてる人もいる。この世の中で明治のムードがアピールしてるということではないか。それに歴史尊重の気持ちが一般に浸透してきた、ということもある」とコメントしている。

この後、1983(昭和58)年には、再び記念艦での撮影を行なって製作された映画『日本海大海戦・海ゆかば』が公開され、この映画は現在まで記念艦内で上映され続けている。

こうした日本海海戦と「三笠」に対する関心が高まる中、1987(昭和62)年には、横須賀市が市制80周年を記念して、「三笠」周辺の大改造を行い、「水と光と音の三笠公園」として再生させ、「三笠」の艦首のすぐ近くに「合唱と管弦楽のための組曲『横須賀』」の記念碑を建立した。(図4参照)そこには、歌詞・楽譜と共に、「私たちの郷土横須賀は、すぐれた自然環境に恵まれ、祖先はこれらの環境の中で生活し、自然を愛し、親しんできました。私たちは、祖先が受けついだ資産を子孫に引き継ぐため『人間都市横須賀』の建設を目指し『人間と人間をとりまく、すべての生命を大切に作る都市』を基本精神として、健康でみどり豊かな環境を創造するため横須賀市制施行80周年を祝賀して実施する『かながわ都市緑化横須賀フェア』を契機に、更にみどりいっぱい都市づくりを目指してまい進することをちかいます」という「みどりのちかい」が刻まれている。

また、この記念碑にある「合唱と管弦楽のための組曲『横須賀』」の歌詞(作詞 栗原登)は、1番から8番まであり、「1. 序章 ふるさとよ」で

は、「近代の 夜明けを告げし 横須賀よ 試練を超えて 立ちしいま
平和を願う 新たなる 門出の街よ 未来あり ああ横須賀未来あり」と
歌われ、以下「2. 黒船来たる」、「3. 衣笠城址」、「4. 谷戸の物語」、
「5. 祭（虎踊り）」、「6. 白きかもめ—弟橘媛命追慕」と続き、「7. コ
ンニチハー港で」では、「遠い国から来た船と 世界の海へ行く船が 白く
残した 波のあと 海の横須賀 船の街」と、「8. 終章 この手で」では、
「わが街は つねに明るく 遅しく 未来を望む」と歌われる。

これに対して、「見事に日本海軍の軍港であった横須賀が抜け落ちてい
る」と、東京大学の木下直之は指摘する⁽⁵⁹⁾。確かに、1番の「試練を超えて
立ちしいま平和を願う」という歌詞からは、敗戦の記憶を示唆するものの、
「新たなる門出」、「未来を望む」にあたって、「戦勝／敗戦」という結
果を問わず、戦争の記憶は忌むべきものとして、排除されてしまっている。
既に東郷平八郎の銅像が立つ「三笠公園」を管理する横須賀市と、記念艦
「三笠」を管理する三笠保存会との間には、戦争の記憶の表象に対する見
解の大きな相違が見られると言えよう。

この「水と光と音の三笠公園」の完成に合わせて、同年5月24日に記念艦
「三笠」で「日本海海戦八十周年記念式典」が行なわれているが、その中
で「海軍長老・保科善四郎元参議院議員（九十六歳）が、『三笠は見事に
復活した。しかし魂を入れなければ、三笠も形骸に過ぎない』と激情をこ
めて訴えた」ことが記されており⁽⁶⁰⁾、この後、戦争の記憶の表象を巡る攻防
が激しさを増していく。

その典型的な例が、1997（平成9）年7月21日に、「三笠」の艦尾近く
に建立された、軍艦マーチとして知られる「行進曲軍艦」の記念碑である。

（図5参照）実は、この記念碑建立のために、記念碑再建準備委員会が設
けられた経緯があり、「再建」しようとした元の記念碑が存在する。その

元の記念碑とは、1943（昭和18）年5月29日に東京の日比谷公園に建立された「軍艦行進曲記念碑」のことで、敗戦後、広瀬中佐の銅像と同様に、昭和22年6月28日に出された「東京都公報第186号」によって、「この碑は、楽曲の碑であるが、その精神は日本海軍を礼賛し、国民の戦意発揚を目的としたものであるから撤去する」とされ、撤去後、記念艦「三笠」の艦底に保管されていた⁽⁶¹⁾。

遡って、1942（昭和17）年10月10日付「軍艦行進曲記念碑建設趣意書」を見ると、この中では「米国太平洋艦隊をハワイ真珠湾に於て粉碎」、「マレー沖海戦に於て英国東洋艦隊主力を撃滅」と、日本海軍の「決定的勝利」を称え、「この決勝の蔭に千古不朽の響も高き名曲『軍艦行進曲』があることを見落としてはならぬ、無敵海軍の情操はこの曲によって育くまれた。嘗つては日露戦争にバルチック艦隊を破りたる日本海に於て、今又、米英を電撃殲滅したる太平洋上に於て高くこの歌をうたい、この曲を奏した。かくて此の歌曲は我が海軍軍人の霊肉と融和し、無限の力ある海軍魂の練成に寄興し、未曾有の国難打開に強力なる精神的協力をなし来つたのである。今次大戦快勝のニュース放送の前後には必ずこの曲は奏せられ、沸き立つ国民の血を弥が上にも高潮せしめ一段の感激と大東亜戦争必勝の決意を固めしめた。之に依つて観れば、この名曲は単り我が海軍の占有にあらずして、海国日本国民の共存する聖曲と云わなくてはならない」と記されており⁽⁶²⁾、かつての記念碑が、日露戦争時の「バルチック艦隊」に対する勝利の記憶と共に、新たな「ハワイ真珠湾」、「マレー沖海戦」の勝利の記憶も重ねて、「大東亜戦争必勝の決意」を表象する記念碑であったことが分かる⁽⁶³⁾。また、この「軍艦行進曲」が、「霊艦」「聖将」を連想させる「聖曲」と呼ばれたことも興味深い。

これに対して、新たな「行進曲軍艦」の記念碑では、「行進曲『軍艦』

は明治三十年海軍軍楽長、瀬戸口藤吉氏によって作曲された。日本の勃興期における行進曲として親しまれ、未来への明るい希望と自信を与え勇気づけるものである。世界3大行進曲の一つとして、音楽史を彩る稀有の名曲で、作曲されてから一世紀を迎える年にあたり、瀬戸口楽長がこよなく愛し、青春の日日を送り己が終焉の地ともなったこの横須賀の三笠公園に行進曲『軍艦』の顕彰碑を建立いたしたものである」と刻まれている。

この新旧の記念碑建立の趣旨を対比させて見ると、当時、どのような記憶が必要とされ、反対に不要とされたのかが鮮やかに浮かび上がってくる。すなわち、敗戦後の社会において行進曲「軍艦」の記憶を保持するには、「日本の勃興期」である明治の「未来への明るい希望と自信」の記憶を想起する必要があり、明治から昭和までの戦争の記憶は、「三笠」の前に立ちながら、ここでは排除されなければならなかったと言えよう。それは、記念碑を再建しようとした人々の本意ではなかったかもしれない。この地を管理する横須賀市当局との折衝の中で生み出された妥協点であったと考えられる。

にもかかわらず、1997（平成9）年7月21日の「行進曲軍艦」の記念碑除幕式の当日、この記念碑の背面は、黒いビニールで覆われた。背面には「行進曲 軍艦」の歌詞である、「一. 守るも攻むるも 黒鉄の 浮かべる城ぞ 頼みなる 浮かべるその城 日の本に 仇なす 国を攻めよかし 三. 石炭の煙は 大洋の 龍かとばかり 靡くなり 弾丸撃つ 響は雷の 声かとばかり どよむなり 万星の波濤を 乗り越えて 皇国の 光 輝やかせ」という文字が刻まれていたが、この歌詞をめぐる、設置前、横須賀市公園管理課の担当者が、「好戦的で平和産業都市が旗印の横須賀にふさわしくない」と削除を指示したのに対し、建立者側は「仮に好戦的だとしても、歌詞と旋律は一体で、あるがままに正しく後世に伝えた

い」と主張して譲らず、これを市当局が「設計違反」として行なった措置であった。さらに、建立から2年後の1999（平成11）年春には、記念碑の背面を「何者かがセメントで埋めてしまった」とされる⁽⁶⁴⁾。

その後、2004（平成16）年3月に、この記念碑は横須賀水交会の手によって歌詞が元通り読める状態にされ、「修復」されたと記念碑の背面に刻まれている。（図6参照）日露戦争100周年を迎えて、遂に「行進曲軍艦」の記念碑は、「三笠」の前に完全な姿を見せたのである。

日本海海戦100周年に当たる2005（平成17）年、記念艦「三笠」には、「日本海海戦100周年－わが国の独立と安全を全うした明治の気概に学ぶ－」の横断幕が張られ、多くの観覧者が訪れている。（図2参照）ちなみに、2004（平成16）年度の入場者数は9万2367人、同年11月6・7日に「よこすか産業まつり」で無料開放された際の観覧者1万1607人を加えると、年間10万人の人が記念艦「三笠」を訪れ、「広報映画」として『日本海大海戦・海ゆかば』が780回上映されて、2万8471人が鑑賞したと報告されている⁽⁶⁵⁾。

そして、艦内には「世界の三大記念艦」として、イギリスの「ヴィクトリー号」、アメリカの「コンスチューション号」の模型と並べて、「三笠」の模型が展示されて「国家の独立と安全に大きく貢献しました」と説明され、また、日露戦争の「世界史的な意義」も説明されている。

しかし、そこには昭和初期から敗戦までのかつての記念艦の記憶を想起させるものは、殆んど見当たらない。わずかに大正末の新聞のコピーが展示され、パネルには「大正15年11月、摂政殿下（昭和天皇）の観艦式を賜り保存式典が行われ、三笠は日本の栄光の象徴として国民に親しまれました。昭和20年、太平洋戦争終了に伴い連合軍が進駐し、『三笠』は上甲板の建造物を全て撤去、放置され、見る影もなく荒廃しました。昭和

30年、『三笠』に愛着を持つイギリス人が横須賀を訪れ、極度に荒廃した『三笠』を見て慨嘆し、その惨状をジャパントイムズに寄稿したことがきっかけで『三笠』復元の機運が高まり、政府、民間、アメリカ海軍の尽力により、昭和36年（1961年）5月27日（日本海海戦記念日）、記念艦として復元されました」と説明されるのみである。かつて「三笠」が博覧会場となり脚光を浴びたことや、5月27日が「海軍記念日」であったことすら触れられず、アジア・太平洋戦争に結びつく記憶は、意図的に消し去られてしまっている。

そして今、2001（平成13）年から登場した扶桑社版『中学社会 新しい歴史教科書』には、記念艦内に展示されている東城鉦太郎画『三笠艦橋の東郷大将以下』の絵が、「連合艦隊の旗艦（指揮をとる艦）・三笠艦橋の図」と題されて掲載され⁽⁶⁶⁾、「国家の存亡をかけた日露戦争」、「日本の生き残りをかけた壮大な国民戦争」、「世界中の抑圧された民族に、独立への限りない希望を与えた」戦争として、日露戦争の記憶が喚起されている⁽⁶⁷⁾。またマスコミも同様に、「三笠」を通して、「民族の誇りここに」⁽⁶⁸⁾、「日本には三笠があるじゃないか！」⁽⁶⁹⁾と、「栄光」の記憶を呼び覚ますことに熱心である。

このように、記念艦「三笠」が表象する日本海海戦の記憶は、敗戦後の社会において「日本人の誇り」の回復に利用されてきたと言える。そして、遠い明治の記憶が喚起される一方で、身近な昭和の記憶は遠ざけられていく。さらに、昭和の記憶の中でも、敗戦後の記念艦の荒廃の記憶は、「頹廃」した日本人が「誇り」を取り戻すエピソードとして残されながら、荒廃の原因となった昭和初期の記念艦の記憶は、抜け落ちてしまっていると言えよう。

3. 巡洋艦「ワリャーク」の顕彰と記念艦「オーロラ」に見る日露戦争の表象

(1) 帝政末期の「ワリャーク」

巡洋艦「ワリャーク」の名は、日本では殆んど知られていないが、ロシアでは、日露戦争中の「名誉の戦い」において「不屈の殉国精神」を貫いた船として、日露戦争中の帝政末期から現在に至るまで、人々の記憶に留められる、日露戦争を代表する軍艦である⁽⁷⁰⁾。

では、ロシアの人々に「名誉の戦い」と記憶されている、1904年2月9日の仁川沖海戦とは、どのようなものであったのだろうか。その戦闘の様様を目撃した、アメリカの『コリアーズ』紙特派員は、「仁川港で炎上するロシア巡洋艦『ワリャーク』」と題する写真と共に、次のように報告している。「ロシア海軍の巡洋艦『ワリャーク』(6500トン)は、勝算のない戦いに勇敢に立ち向かった艦船として海戦史にその名を刻んだ。巡洋艦5隻、装甲巡洋艦1隻、水雷艇隊2隊を擁する強力な日本軍に対し、6インチ砲12門しか搭載していない『ワリャーク』と、小さく非力な砲艦『コレーツ』が挑んだのである。出航に際して『ワリャーク』のルードネフ艦長は軍楽隊に演奏させ、港内に停泊している諸外国艦船の乗組員は2隻の勇気に喝采を送った。瓜生艦隊の『浅間』が発射した最初の2発の砲弾が『ワリャーク』に命中し、二つの汽缶(ボイラー)が破壊され、艦橋が吹き飛ばされた。『ワリャーク』は船体が大きく左に傾き、左舷の砲列が事実上使用不能となってしまふ。戦闘から50分、『ワリャーク』は大砲が完全に破壊され、火災が発生してエンジンが停止した。甲板には109名の死傷者が横たわっていた。ほうほうの体で港内へと逃げ帰った『ワリャーク』は、乗組員が下船すると火を放たれ、船底弁が開けられた。その3時間後、

世界でも最新鋭を誇ったこの巡洋艦は、18ヶ月という短い勤めを終え、傷つき焼け焦げた船体を海底に沈めたのだった⁽⁷¹⁾。

また、1920年にロシア海軍軍令部が編集した『千九百四、五年露日海戦史』によれば、「ワリャーク」艦長ペイ・F・ルードネフ大佐は、出撃を前に乗組員に対して、「断シテ敵ニ降ルコトナク」奮闘し、「冷静沈着ニ毫モ狼狽スルコトナク」責務を尽して「必ス敵ニ損害ヲ与ヘ」、「天佑ヲ確信シテ我ガ皇帝陛下、我ガ祖国ノタメニ勇敢ニ戦場ニ赴カン」と訓示したとされ⁽⁷²⁾、巡洋艦「ワリャーク」は、砲艦「コレーツ」と共に、圧倒的な兵力を持つ日本の艦隊と戦闘を交え、降伏を拒否して自沈した。

この日露戦争緒戦の「勝算のない戦いに勇敢に立ち向かった」巡洋艦「ワリャーク」のニュースは、新聞によって瞬く間に欧米に広められて高い関心を呼び、自沈後に生還した乗組員の様子も詳細に取材されている。

アメリカの『コリアーズ』紙は、乗組員が帰国した際のロシアでの歓迎振りを、「自沈した巡洋艦『ワリャーク』と砲艦『コレーツ』の生存者が本国帰還を果たし、極東で勇戦した将兵を初めて目にするロシア国民は歓呼の声で迎えた。国じゅうが彼らに対する誇りと愛情に胸を躍らせたのも当然のことである。降伏を潔しとせず、軍艦旗を掲げて軍楽隊の演奏も勇ましく出港し、圧倒的に優勢な敵の艦隊に堂々と立ち向かった勇士たちがここに帰還したのだ。避けられぬ敗北をものともせず、死をも恐れず勇壮に戦い、戦友の多くは屍となって甲板に残されたまま艦とともに沈んでいった。幸運にも生還した者たちを、ロシアの民衆は喝采で迎え、祝典を催し、その栄誉を称えた。実際には惨敗を喫した将兵たちを、人々は征服を成し遂げて凱旋した勝者のごとく迎えたのである」⁽⁷³⁾、「オデッサ（ロシア黒海艦隊の根拠地）では、仁川沖海戦を生き延びた将兵の帰還を祝して歓迎式典が開かれることになり、何週間も前から準備が進められた。街はアー

チや幕、装飾が施されたポールなどで華々しく飾りつけられ、生還兵を乗せた汽船が到着すると、祝砲が次々と鳴り響いた」⁽⁷⁴⁾と記している。

この歓迎の波は、首都サンクト・ペテルブルクにまで押し寄せ、アレクサンダー・ホールでは「仁川沖海戦で勇戦した海軍将校に対する記念品の授与」⁽⁷⁵⁾が催され、冬宮では「兵士たちは皇帝に拝謁を許され、記念品が下賜された。上着には従軍記章が留められ、おのおの手にしている包みのなかには、さまざまな品物が収められている。これ以外にも兵士たちにはロシア国じゅうから現金、宝石、衣服などの贈り物が殺到した。ペテルブルクの街は華やかに飾りつけられ、かりに海戦に勝利を収めての帰還であったとしても、これ以上の歓迎はありえないという賑わいだった」⁽⁷⁶⁾とされる。また、乗組員たちは、皇帝から「アンドレーエフスキー軍艦旗ノ名誉ト神聖ナル大露国ノ威信ヲ保持シタルヲ感謝ス」という言葉を賜ったという⁽⁷⁷⁾。

さらに、「ワリャーグ」の戦闘の模様に対して感銘を受けた、ドイツの詩人ルドルフ・グラインツが発表した「ワリャーグ」を称える詩を、政府はロシア語に翻訳し、曲を付け軍歌として広めるなど⁽⁷⁸⁾、戦況の悪化に加えて、革命の機運が広がるロシアの国内状況の中で、帝政政府は「英雄」を欲し、民衆の「ワリャーグ」人気におもねる形で、それを顕彰し記念することに躍起となったと言えよう。

(2) ソ連時代の「ワリャーグ」と「オーロラ」

帝政政府が、日露戦争遂行と革命阻止のために、巡洋艦「ワリャーグ」を熱心に顕彰したのに対して、ロシア革命後誕生したソヴィエト政府は、スターリン政権になるまで、「ワリャーグ」を積極的に称える姿勢は見られない。

それは、革命の主演となったレーニンの日露戦争に対する見方に、影響されたためであろうか。かつて、日本海海戦でのバルチック艦隊の壊滅の報に接したレーニンは、1905年6月9日、『プロレタリー』紙の第3号に「壊滅」と題する次の論説を発表している。「ロシア海軍は完全に撲滅された。敗戦は覆すべくもないものとなった。(中略)われわれの前にあるのは、単に軍事的敗北ではなく、専制政権の完全な軍事的破滅なのだ。ツァーリズムの全政治的システムの破綻としての、この挫折の意義は、日本人によって加えられる新たな打撃の一つ、一つごとに、ヨーロッパにとっても、ロシアの全国民にとっても、ますます明瞭になりつつある。(中略)ヨーロッパのブルジョアジー、この、ツァー政権にとっての最も忠実な支柱も、同様に忍耐を失い始めている。国際関係における不可避の再編成、若い、新鮮な日本の威力の増大、ヨーロッパにおける軍事的同盟者の喪失が、ブルジョアジーを恐怖に陥れている。(中略)専制政権は、ほかでもない、冒険主義によって国民を馬鹿気た、恥辱的な戦争に投げ込んだのだ。同政権は今や当然の終末の前に立たされている」⁽⁷⁹⁾。

このレーニンの、日露戦争を「馬鹿気た、恥辱的な戦争」と捉え、その敗北を「ツァーリズムの全政治的システムの破綻」と見る姿勢に対して、元外交官でソ連大使館勤務経験のある清水威久は、「レーニン時代、そしてレーニンの死後も死後も十年やそこらの間、ソ連全体が日露戦争をレーニンの的に解釈し、ツァー政府の非難をこそすれ、ロシアが負けたこと自体

を悔やむようなところはなく、逆に日本との戦争に関連して第一次革命が惹起され、その第一次革命が土台となって一九一七年の大革命が成功したのだとし、日本が帝政ロシアを窮地に追い込んだことを、間接的にはあるが、大いに多としていたのではなかったか」と評する⁽⁸⁰⁾。

しかし、スターリン政権下のソ連が、第二次世界大戦末期に日本と戦って「勝利」した頃から、日露戦争に対する見方が大きく転換する。1945年2月、スターリンは米英両首脳とヤルタ会談を行い、4月初めに日本に中立条約の破棄を通告、5月にドイツが降伏した後、8月8日、日本に対して宣戦し「勝利」を収めた。

日本が連合軍に対し、降伏文書への調印を行なった1945年9月2日、スターリンは、「日本降伏の日」のソ連国民に対するメッセージを、ラジオ・新聞を通して次のように発表した。「一九〇四年の露日戦争の時のロシア軍の敗北は、国民の意識のなかに重苦しい思い出を残した。それは、わが国の上に黒い汚点をとどめた。わが国民は、いつの日にか日本が撃砕され、汚点が払拭される時が来らんことを信じ、待っていた。われわれは、年長世代の者たちは、四十年の間、その日を待ち侘びていた。そして今や、その日が到来したのである。本日、日本は自らを敗者と認め、無条件降伏の文章に署名した」⁽⁸¹⁾。

スターリンは、この中で日露戦争の敗北の記憶に触れ、それはソ連国民にとって「重苦しい思い出」や「黒い汚点」であり、日本の「撃砕」によって「払拭」されるべきものであったことを表明している。

そして、このスターリンの日露戦争に対する新たな姿勢は、1947年に刊行された、パンクラートフ教授の監修による中等教科書『ソヴィエト連邦史』の日露戦争の記述に反映されている。そこには、1904年1月27日の日本艦隊による旅順港の攻撃に触れた後、「同じ日に仁川沖でも巡洋艦『ワ

リャーグ』と砲艦『カレーエツ』が優勢な敵と闘って、英雄的な最期を遂げた」⁽⁸²⁾ことが記された。

そして、第二次世界大戦後の東西冷戦が次第にエスカレートする中で迎えた1954年、ソヴィエト政府は、巡洋艦「ワリャーグ」の仁川沖海戦50周年記念事業を大々的に行なった。

まず、同年2月9日付『プラウダ』紙には、連邦最高会議幹部会が、生存中の「ワリャーグ」乗組員15名に「勇敢記章」を授与することを決定したことが報じられ、その内の12名の老人たちが当時の艦長ルードネフ大佐の子息を囲んで話をしている写真と、「『ワリャーグ』の英雄的武勲の50周年」という見出しの次のような記事が掲載されている。「ソビエト国民は本日、仁川沖の日本艦隊との戦闘における巡洋艦『ワリャーグ』と、砲艦『カレーエツ』の乗組員たちの英雄的武勲の50周年を記念する。この日を迎え、陸海空軍諸部隊、労働者クラブ、『文化の家』では講演会、座談会、記念の夕べなどが催される。モスクワのソビエト軍中央会館においては『ワリャーグ』の奮戦を物語る資料の展覧会が開かれている。現在モスクワには『ワリャーグ』の水兵たちが集まっている。彼等は昨日ツーラ州のルードネフの墓を訪れた。墓の前で追悼式が行なわれ、花輪が捧げられた」。また、ソ連海軍総司令官クズネツォフ大将も、同じ新聞に「ロシア海兵たちの光栄ある武勲」と題する手記を寄稿し、「帝政ロシアと日本との間には、双方の掠奪的、侵略的計画実現のための戦争が近づきつつあった。日本は満州への侵入を企画し、サハリンとわが極東諸州の略取を夢見ていた。日本は背信的に、戦争宣言なしに、旅順港のロシア艦隊を襲撃した。『ワリャーグ』と『カレーエツ』は中立国朝鮮の仁川港で、日本艦隊（十四隻）の背信的襲撃を受けた。両艦はルードネフ大佐の指揮下に奮戦、敵の駆逐艦一隻を撃沈、巡洋艦二隻に損害を与え、最後まで降伏しなかつ

た。それ以上の戦闘が望めなくなった時、ルードネフ大佐は正しい道を選び、『カレーエツ』を自爆させたが、『ワリャーグ』の爆沈にたいしては付近の外国艦船から反対が出たので、キングストン（艦底弁）を開いて沈没させた。乗組員たちは外国艦艇に收容されたが、アメリカ軍艦だけは引取りを拒んだ。『ワリャーグ』の武勲はロシア全国に鳴り響いたばかりでなく、外国にまで知れわたり、乗組員たちは帰国の途中サイゴン、ポートサイドその他で歓迎を受けた。故国は彼等を盛大に迎え、全国から数限りない電報が届いた。『ワリャーグ』という名称はソ連の軍と国民にとって尊いものであり、この光栄ある巡洋艦の英雄的伝統を継承させるため、ソビエト巡洋艦の一隻に『ワリャーグ』という名をつけることになっている」と、「ワリャーグ」の戦果を誇張し、「背信的」な日本と「冷淡」なアメリカに対する非難を織り交ぜながら、その「光栄ある武勲」を称えている⁽⁸³⁾。

これに続けて、翌2月10日『プラウダ』紙にも、「巡洋艦『ワリャーグ』の海兵たちの比類なき武勲」と題する記事が掲載され、「九日ソビエト軍中央会館で『ワリャーグ』の武勲を偲ぶ記念会議が催され、クズネツォフ大将の挨拶、アンドレーエフ大将の報告、当時の乗組員たちの回想談、ルードネフ艦長の息子の父についての思い出話などがあり、そのあと芸術映画『巡洋艦ワリャーグ』の映写と盛大なコンサートがあった」ことが報告されている⁽⁸⁴⁾。

この他にも、1954年には『ワリャーグの英雄たち』と題する本が出版され、2年後の1956年10月1日付『プラウダ』紙には、仁川沖海戦の五十周年に際して決定され、ツーラ市に建設中だったルードネフ艦長の「双眼鏡を手にして敵を睨んでいる姿」の銅像が完成し、9月30日に除幕式が行なわれたことが報告されるなど⁽⁸⁵⁾、帝政末期同様、ソビエト政府は、国を

挙げて「ワリャーグ」に対するコメモレイションを活発に行なっている。まさにそれは、冷戦下において西側陣営との戦いに利用出来る日露戦争の記憶が必要とされ、活用されたことを物語っていると言えよう。

しかし、「『ワリャーグ』の英雄的武勲」が大々的に記念され顕彰される一方で、「ワリャーグ」の軍艦としての「後半生」については、そこでは何も語られていない。

艦船史に詳しい、元防衛大学教授の平間洋一によれば、仁川において自沈した後の「ワリャーグ」は、日本海軍の手によって1905年8月に引揚げられて修理され、「宗谷」と命名されて日本の軍艦となった。そして1914年に勃発した第一次世界大戦において、日本はロシアと同じ連合国の一員となってドイツと対峙したことから、ロシアとの間に同盟関係を築こうとし、また、ロシア海軍からも「帝国軍艦ノ譲渡ヲ懇望」されて、1916年、「宗谷」（巡洋艦「ワリャーグ」）を、他の2隻の戦利艦「相模」（戦艦「ペレスウェート」）、「丹後」（戦艦「ポルタワ」）と共に、ロシアに売却して返還した。その引き渡しの際、ロシア海軍は日本側の回航部隊に対して、「熱誠極マル歓喜ヲ以テ」迎えたという⁽⁸⁶⁾。その後、元の艦名に戻った「ワリャーグ」は、バルト海での警備作戦に従事したが、1917年にボイラー修理のため、リバプールの造船所に回航された。しかし、修理中にロシア革命が起り、イギリスによって接收され、最後はドイツ企業に屑鉄として売り渡されて回航中の1920年、アイルランド海で沈没、船としての生涯を終えたのである。

このように、「ワリャーグ」の「後半生」は、「名誉」とは無縁のものであり、また一時的にせよ日本との「友好」を象徴するものであったという記憶は、当時の社会状況の中で不要なものとして、「三笠」の「後半生」同様、「栄光」が強調される陰に埋もれていったと言える。

では、ソ連の「栄光」を記念するもう1隻の巡洋艦、「オーロラ」についてはどうであろうか。次に、「オーロラ」にまつわるロシア革命の記憶について見たいと思う。

ソ連の映画監督セルゲイ・エイゼンシュタインは、日本海海戦の翌月の1905年6月に、ロシア黒海艦隊の戦艦「ポチョムキン」で起きた水兵の反乱を題材に、ロシア第一革命を記念する映画『戦艦ポチョムキン』を製作し、1925年に公開されるや、ソ連を代表する映画監督として一躍有名になったが、この『戦艦ポチョムキン』に続けて今度は、第一次世界大戦中の1917年11月（ロシア暦10月）、首都ペトログラード（サンクト・ペテルブルクから改名、後のレニングラード、現サンクト・ペテルブルク）で起きた十一月革命（第三革命）を記念した映画『十月』を製作し、『十月』は1927年に公開された。

この『十月』のクライマックスシーンでは、ペトログラードの冬宮に対するボルシェビキ側の攻撃の火花を切った軍艦として、巡洋艦「オーロラ」が登場し、その活躍が華々しく描かれており、戦艦「ポチョムキン」と並んで、巡洋艦「オーロラ」は、ロシア革命のシンボリック的存在と見なされ、両艦の名はソ連の人々の記憶に刻み込まれた⁽⁸⁷⁾。(図17・18参照)

そして、第二次世界大戦後の1956年には、「オーロラ」はレニングラードの冬宮の前を流れるネヴァ川に係留されて記念艦となり、「革命博物館」として多くの観覧者を集めて、現在までに2900万人もの人々が記念艦「オーロラ」を訪れている⁽⁸⁸⁾。(図15参照)

ここで、ソ連時代の記念艦「オーロラ」を知るために、1983（昭和58）年1月17日放映のNHK特集『レニングラード物語』を製作した、NHK取材班が著した『レニングラード物語 華麗なる都の250年』を見たい。そこには、ソ連側の案内役の「ビノグラードフ氏」の説明をもとに、次の

ように記されている。「『アウロラ号』は、旧バルチック艦隊の新鋭艦として、同型の3隻のひとつとして建造された。日露戦争のとき日本海海戦に参加するためバルト海を出航したが、三隻のうち最後に建造されたこともあって装備が遅れ、艦隊のあとを追っているうちに敗戦の報に接し、引き返したという。三本の大きな煙突をもった灰色の船体は、ちょっと横須賀の記念博物館となっている旧日本海軍の戦艦『三笠』に似た感じだが、今は岸壁に錨を降ろしソビエト海軍中央博物館の分館になっている。実際『アウロラ号』は、レニングラード観光にとって、絶対欠かせない名所になっている。ネヴァ川を行き交う観光船も、必ず『アウロラ号』に近づき、乗客はいっせいにカメラのシャッターを切る」と、「オーロラ」は日本海海戦に参加せず引き返した船として紹介され、ソビエト海軍中央博物館の分館となってロシア革命の「名所」になっていることが触れられる。そして、ガイドである「革命の数少ない生き証人であるビノグラードフさんは、この町にとって大事な人物である。豊かなアゴヒゲをたくわえ、背広の胸に国家から贈られた無数の勲章を飾ったビノグラードフさんが岸壁に着くと、海軍士官の制服で身を固めた『アウロラ号』の当直指揮官が威儀を正して出迎えた。博物館とはなっているものの、革命の聖地として、ソビエト海軍のシンボルとして、選び抜かれた海軍将兵たちが交代で厳重な警備に当たっている。『アウロラ号』の館長、つまり中央博物館分館の館長も海軍士官だが、私たちはこの人の案内で館内の撮影を始めた。艦の記念室の中には、当時、リティヌイ橋をはさんでネヴァ川対岸のスモーリヌイの革命本部と交信を続けた通信室もあり、当時の写真や各国から寄せられた贈物などが展示されている。艦首には、ペトロパヴロフスク要塞から打ち上げられたのろしに呼応して、最後の『冬宮』突入を合図した主砲の六インチ砲が、太い砲身を突き出している」⁽⁸⁹⁾と説明され、「オーロラ」が「革命の聖

地」，「ソビエト海軍のシンボル」として，記念される様子が描かれている。

これに対して，日本海海戦に参加した戦艦「アリヨール」の乗員で，生還後の1933年に『ツシマ』を著した，ノビコフ・プリボイによれば，「オーロラ」は，バルチック艦隊出発早々にドイツ領海にあるドッカーバンクで操業中の漁船を敵艦と見誤って砲撃した「グウル事件」の際，同士討ちで攻撃され損傷を受け⁽⁹⁰⁾，日本海海戦時には「ウラジオストクへ直航すべし」との命令に反し，エンクヴィスト提督と共にアメリカ領フィリピンのマニラへ離脱して，武装解除を受けたことが明らかであり⁽⁹¹⁾，先の「ピノグラートフ氏」の説明は事実と反する。

しかし，巡洋艦「オーロラ」の「ツシマの戦い」における敗北の記憶は，かってスターリンが「黒い汚点」と呼んだように，ソ連の「栄光」の記憶の象徴である記念艦「オーロラ」にとって，不要なものとして排除されなければならなかったのかもしれない。このように，「栄光」には程遠い「オーロラ」の「前半生」もまた，「三笠」や「ワリャーグ」同様，ソ連時代には積極的に語られることはなかったと言える。

それでも，「オーロラ」が記念艦となった1956年当時には，日露戦争に関する展示がなかったのに対し，1980年代半ばからは日露戦争に関する展示も見られ始めた⁽⁹²⁾とされ，大々的に喚起される仁川沖海戦の記憶とは対照的に，長く封印されてきた「ツシマの戦い」の記憶が，徐々に顕在化の兆しを見せ始めたことは，その背景にあるソ連の政治体制や社会の変化を映し出すものと言えよう。

(3) ソ連崩壊後の「オーロラ」と「ワリャーグ」

ソ連崩壊後、「革命博物館」としての記念艦「オーロラ」は、「海事博物館」として再出発した。そして、それに伴い「ツシマの戦い」の記憶が、「オーロラ」において、本格的に語られ始めている。反対に、「オーロラ」は日本海海戦に参加し生き残った船として、新たな存在意義を与えられたとも言えよう。

それを象徴するのが、「オーロラ」内にある士官室を利用して会合が開かれている、日本海海戦に参加したロシア将兵の子孫の組織「ツシマ会」である。この「ツシマ会」は、ソ連崩壊後の1999年に結成され、現在1000人以上の会員を擁しているが⁽⁹³⁾、「ツシマ会」の発案者で、日本海海戦で沈んだ戦艦「シソイ・ベリーキー」の艦長のひ孫にあたるコンスタンチン・オーゼロフ氏によれば、「露日戦争はロシア人にとって、ナショナリズムを高揚させるようなものではありません。むしろ恥ずべき記憶でしょう。しかし、故国の名誉のために戦った割に先祖の情報が少なすぎる」と話し、ロシア革命に伴う反宗教キャンペーンによって1932年に破壊された、日本海海戦の犠牲者をまつる教会の復興を進めるなど、祖先の「名誉」の回復のために活発に活動している⁽⁹⁴⁾。

そして、2004年3月、ポーツマス講和100周年を記念してサント・ペテルブルク国際会議（主催：山梨学院大学、共催：ロシア海軍中央博物館）が開催され、記念艦「オーロラ」において、バルチック艦隊司令長官ロジェストvensキーのひ孫にあたるジノビー・スペチンスキー氏ら「ツシマ会」関係者と、東郷平八郎のひ孫の保坂宗子氏や三笠保存会関係者が会して「オーロラ号と三笠号の100年後の再会」が催された⁽⁹⁵⁾。（図16参照）

こうした活動を通して、これまでとは逆に、「オーロラ」の「前半生」に焦点が当てられるようになり、それを「黒い汚点」としてきたことに対

する見直しが始まったと言える。

しかし、その一方で、日露戦争百周年を迎えて、巡洋艦「ワリャーグ」の顕彰もまた再燃している。2003年7月には、ロシア国営テレビの取材班が、沈没していた「ワリャーグ」を発見し、83年ぶりに船体の一部が引き上げられた。2004年2月に、引揚げ時の模様がドキュメンタリーとして放映されると、「タイタニック」になぞらえる声まで飛び出したという。また、モスクワでは『ワリャーグの偉業百年史』と題する豪華本が出版され、各地で退役軍人会などが主催する記念行事が催されるなど、「ワリャーグ」の人気が高まっており⁽⁹⁶⁾、冒頭で触れた「ワリャーグ」記念碑の韓国での建立や、模型の製作・販売は、この一連のブームの現れと見る事が出来る。

(図14参照)

そして、近年、この「ワリャーグ」を巡って、政治家の発言も目立つようになってきている。2002年にサッカーのワールドカップ大会が日本で開催された時には、ロシアのジリノフスキー下院副議長が「映画『巡洋艦ワリャーグ』を日本に持ち込み、愛国心と敵愾心をあおってやる」と発言し⁽⁹⁷⁾、『ワリャーグの偉業百年史』の序文には、S・B・イワノフ国防大臣が、ロシア国民は「過去に立脚し、ロシアの軍事力を維持し増強するため、偉大で比類のない我々の過去の遺産を記録し敬わなければならない」と記したとされる⁽⁹⁸⁾。これに対し、モスクワ市公文書館のドミトリー・パブロフは、「済物浦（韓国の仁川）の投錨地から5マイルの地点で繰り広げられた1904年2月10日（露暦1月28日）の悲劇的事件は、100年前と同様、ロシアではそのヒロイズムの点でロシア海軍史上比類のない事件とみなされている」と、ロシアの現状を評している⁽⁹⁹⁾。

このように、現プーチン政権下で「ワリャーグ」の記憶が再々度注目されていることに対して、雑誌『歴史の諸問題』のアフメド・イスケンデロ

フ編集長によれば、ニコライ2世、スターリン、プーチン大統領の三つの時代には、共通して「強烈な大国、強国願望」があり、「大国を演出して、政権の威厳を保つには国民の愛国心をくすぐるのが手っ取り早い」と指摘する。また、歴史家ロイ・メドベージェフは、この現象を「ソ連崩壊後も正当な歴史観が定められず、歴史解釈や史実の評価が揺れ動いているためだ」と説明している⁽¹⁰⁰⁾。

こうした状況を反映して、現在ロシアでは、「ワリャーグ」の奮戦を紹介し自沈したロシア海軍水兵を「愛国英雄」と称える教科書が存在し⁽¹⁰¹⁾、2003年版の中学校（9学年）歴史教科書では、日露戦争について「ツシマ（日本海海戦）は露軍軍史の汚辱の一ページとなり、露国民の国家的自尊心をいたく傷つけた」と記述するなど、愛国主義的な叙述が歴史教科書に登場し始めている⁽¹⁰²⁾。

以上のように、日露戦争の記憶を巡ってロシアでも、ソ連崩壊後の不安定な社会状況の下で、「ツシマ会」に見られるような、これまで封印されてきた「恥ずべき記憶」に対する異議申し立てと、「ワリャーグ」を通して「ロシアの誇り」を回復しようとする動きが同居し、まさに戦争の記憶の表象を巡る闘争が繰り広げられていると言える。

4. 日露戦争の記憶と歴史授業－歴史表象の現在性を学ぶ－

軍艦は日露戦争を教える際の「有効」な教材として、今なお教師によって用いられている。戦前の記念画「三笠艦橋の図」が、扶桑社版の中学校歴史教科書に登場したことは先述したが、この「三笠艦橋の図」を教材として用いた、小学校の歴史の授業実践が報告されている。

横浜市立芹が谷小学校の安達弘は、記念艦「三笠」のパンフレットを参考にしながら、横浜市立六つ川小学校6年生の歴史の授業で、日本海海戦の授業実践を行い、それをもとに「東郷平八郎 世界中の人々を歓喜させた日本海海戦の歴史的意義を教える」⁽¹⁰³⁾を著した。

その中では、「次ページの一枚の絵をごらんいただきたい。これは東城鉦太郎画『三笠艦橋の図』という。中央に右手に双眼鏡を、左手にサーベルを持った東郷平八郎がいる。私は東郷平八郎の授業はこれだ、と思った。なぜなら、この一枚の絵にこの後の授業展開に必要なアウトラインと最大のポイントが描き込まれているからである。アウトラインとは『戦場』のことである。そして、最大のポイントとはZ旗のことである。絵の中には甲板に立つ将校と水兵、煙を上げて走る仲間の軍艦、被弾による災害を防ぐために巻かれたクッションのようなもの、羅針盤、距離を測る距測儀など『ああここは海の戦場なんだ』ということがわかるアイテムがいくつも見つかる。そして、左上には黄色・青・赤・黒の四色に塗り分けられたZ旗がはためいている。ご存知の通りZ旗には『皇国の興廃この一戦にあり、各員一層奮励努力せよ』という意味がある。これが日露戦争の歴史上の意義を教える上で最大のポイントになる。日露戦争は国民防衛戦争である。

『皇国の興廃』というフレーズは日本が生きるか死ぬか－つまり独立国として栄えるか、それともロシアの植民地になるかという歴史の大分岐点だ

ったことがわかる言葉である。この言葉の意味を検討させるだけで日露戦争の意義が子どもたちに伝わる。Z旗の発見・『興廃』という言葉・日露戦争の意義という流れである」と、「三笠艦橋の図」を教材として用いる授業を構想し、実際の授業では、「三笠艦橋の図」を提示してZ旗の「皇国の興廃この一戦にあり、各員一層奮励努力せよ」の意味を子どもに調べさせた上で、「ところで『興』の方はこれからますます発展するということがわかるんですが…。『廃』の方はほろびるといというのは具体的に言うと、どうなってしまうということなんでしょう」と子どもに問いかけ、「日本が負けていたらまず間違いなく植民地にされていたでしょう。そうなら今頃私たちはロシア語をしゃべり、ナントカスキーとかナントカチヨフという人もいます」、「つまり、日露戦争というのは日本が独立して生き残るか、それともほろびてロシアの植民地になるか、二つにひとつのギリギリ断崖絶壁での戦いだったのです」と説明し、「東郷平八郎と日本海海戦」と題するプリントを読ませて、「こうして日本は国の独立を守ることができたのです」とまとめている。

それに加えて、「さらに子どもたちに日露戦争の世界史的意義も伝えたい。東郷ビールを主教材、地図帳を副教材にして、『アドミラル・トウゴウ』が象徴する日露戦争の世界史的意義を子どもたちに考えさせたい」との意図から、授業では東郷ビールの意味を質問した後で、「日本の勝利を喜んだ国はフィンランドだけではありません」、「じつは日露戦争は、植民地化されたアジアの国や、強い国に支配されていた弱い国に、勇気と希望を与えた戦争だったんです。強い白人の大国に日本のような小さな国が勝ったんだからね」と結んで授業を終えている。

安達は、この授業を受けた小学6年生の、「もしもロシアの占領下に日本がなくなってしまったら、もう日本という国はなくなっていて日本の伝統も

文化もないのだということを考えると、やはり日本というちっぽけな国が植民地にならずにいたのは偶然の連続なのだと改めて思い知った」という感想を挙げ、近現代史の人物学習でキーパーソンの行動や思想を追体験させていくことで、「その当時の人と同じ思考ができるようになる」ことに気付いたとし、「小学生はもともとリアリストである。私たち大人と違って曇りのない目で歴史を見ることができる。こうした子どもたちは、授業の中の討論や話し合いで甘ったれた理想主義や画一的な時代観を軽く吹き飛ばしてしまうのである」と締めくくっている。

歴史教育では、記念碑や銅像、記念画といった資料を授業で教材として用い、歴史理解の手助けとすることが盛んに行われている一方で、文部科学省・教科調査官の原田智仁も指摘するように、あくまでそれは、「本文に登場する人物や出来事に一定のリアリティをもたらすための手段と捉えられており、それ自体を問うことはほとんどない」⁽¹⁰⁴⁾ と言え、コモレイションが帯びる政治性を十分に吟味することなく、ビジュアルな教材として珍重する傾向がある。

安達の授業においても、「三笠艦橋の図」が想起させる日本海海戦の記憶を「国民防衛戦争」の記憶として疑わず、この学習を通して「その当時の人と同じ思考ができるようになる」と言って憚らない。

これに対し、かつて「三笠艦橋の図」は、1921（大正10）年から『尋常小学国史』（三期）に挿絵として登場し、文部省教科書編集課長・図書監修官であった藤岡継平が1938（昭和13）年に著した『挿画を中心とする国史教育－尋常小学国史挿画の解説と其の精神』の中では、「我が国はさきに清国と戦い、今又世界の強国ロシヤと戦って、未曾有の大勝を博したので、我が政治・経済・文化は実にこの二大戦役を界として、漸次一大進歩を遂げたのである。殊にこの日露戦役は、世界の強国と干戈を交えて我が

国が愈々世界的な画期的のものである」とした上で、「三笠艦橋の図」をもとに、「日本海海戦の大勝利は、世界海戦史上にも空前の偉績である」が、旗艦に掲げられたZ旗に対して、「我が僚艦が皆この信号を受取ると、将士互に見合って各自の責任の大なるを自覚し、一層の緊張を加え、士気特に振い、その緊張した気分が、やがてこの空前の大勝利となった」ゆえに、「能く全軍激励の信号と全員一死報国の決心とを説いて、児童を感激させねばならぬ」とされていた⁽¹⁰⁵⁾。

同じ絵を教材として用いても、そこから想起される日本海海戦の記憶は、「国民防衛戦争」、「独立国として栄えるか、それともロシアの植民地となるか」に対し、「空前の偉績」、「全員一死報国の決心」と、大きな隔たりがあり、また、「世界史的意義」についても、「植民地化されたアジアの国や、強い国に支配されていた弱い国に、勇気と希望を与えた戦争」に対して、「世界の強国と干戈を交えて我が国が愈々世界的な画期的なもの」とされるなど、記念艦「三笠」同様、この記念画が表象する日露戦争の記憶も、時代の制約を大きく受けていることが分かる。

それゆえ、日露戦争を記念する軍艦は、軍艦を記念し顕彰した社会の文脈上で捉え直すことが必要であり、それは日露戦争当時を学ぶための教材ではなく、軍艦にまつわる戦争の記憶が、日露戦争後の「現在」の状況に合わせて想起され、社会の変化と共に創り直される性質、すなわち歴史表象の現在性を学ぶ教材として、用いるべきではないだろうか。

この、「歴史」とは一体どの様に表象されるのかという、「歴史」そのものの意味を原点に立ち返って探ろうとする、メタヒストリーに対する関心は、近年の高等学校の歴史教育において高まりを見せている。

実際、2004（平成16）年発行の東京書籍版『日本史A 現代からの歴史』の巻頭では、「歴史は、すべて現代の歴史である」と掲げて、「わた

私たちはややもすると、歴史は過去のことだと考えやすいが、そうではない。過去のことがらは無数にあるが、それが歴史として意味をもつのは、現代とのかかわりにおいてである。現代をどうみるか、あるいは現在をどう生きるか、という立場にたって、過去をふりかえるとき、過去のことがらは、はじめて意味をもった歴史の事実としてとらえ直されるのである」、「いま刻々とかわりつつある現在という観点から、歴史は叙述されるがゆえに、歴史はつねに新しく書き直されるのである。だから歴史は、それぞれの時代の価値観と切っても切れない関係にある」と説明され、その具体例に敗戦を機として歴史教科書自体が「大きく書きかえられた」ことを挙げて、歴史表象の現在性を正面から取り上げ、「歴史を学ぶということ」は、「現代に生きているわれわれが、現在をどのように生き、これからをどう生きぬいていくかを自覚するために、これまで歩んできた過去に目をむけ、その意味を問い続けることにほかならない」、「君たちひとりひとりが、主体的に生きるということなのである」と歴史を学ぶ意義を述べているのである⁽¹⁰⁶⁾。

しかし、その学習のための具体的な手立ては教科書の中では何ら示されることがない。それどころか、歴史教科書の叙述のスタイルは、巻頭で掲げる理念と大きくかけ離れてしまっているのが現状である。例えば、歴史学の立場から二宮宏之は、「歴史の基本線はこうであり重要事項はこれこれであると、あたかも客観的であるかのように記述していく教科書のスタイル」そのものが問題であり、そこには歴史の書き手も読み手も入り込む余地がほとんどなく、まるで「天から降ってくる歴史」のようだと批判している⁽¹⁰⁷⁾。

このように、高等学校の歴史教科書では、歴史表象に対する問題意識を持つ一方で、教科書によって表象される歴史像を、絶対的な「歴史」とし

て、読み手に押し付けるという矛盾した状態に陥っている。これでは「過去に目をむけ」、「主体的に生きる」生徒を育てることなど、不可能に近いと言わざるを得ない。

それでも、記念碑等の「記憶のかたち」に注目し、歴史表象の意味を考察しようとする傾向は、年々強くなっている。その現れとして、センター試験において、繰り返し歴史表象に関する問題が出されていることが挙げられよう。まず、2002（平成14）年実施の世界史の問題文では、「しばしば過去の偉大な人物や出来事にかかわる記憶が喚起された。同じ過去を共有することで、人々の間に一体感や政治体制への共感が生まれると期待されていたのである」⁽¹⁰⁸⁾と説明され、また2004（平成16）年実施の世界史の問題文では、「近代ナショナリズムは、18世紀末から19世紀にかけてヨーロッパと南北アメリカ大陸に現れて以降、多くの場合、ネーション・ステート（国民国家）の建設と強化を志向してきた。その際、国民国家を人々に意識させるために、シンボルや儀礼が盛んに用いられた。そうしたシンボルや儀礼の例として、国民国家を象徴する旗や歌、彫像など、また、ネーションの歴史のなかで重要とみなされた、建国や革命、戦争のような事件を記念する記念碑や祭典がある」とし、記念碑の実例として1913年にドイツで建設されたライプツィヒの戦い（諸国民戦争）記念碑と、フランスで1878年に設置された共和国像が取り上げられ⁽¹⁰⁹⁾、さらに2005（平成17）年の世界史の問題でも「歴史上の出来事を記念した建造物や祝祭・儀礼は、民衆の心のよりどころとされるとともに、政治的な意味を持つ」と説明されて、古代文明を記念した建造物の例として、シカゴ万博の「ホワイト・シティ」、ルーヴル美術館のガラスのピラミッド、パリ近郊の「ラ＝グラン＝アルシェ」⁽¹¹⁰⁾が取り上げられている。

また、高校の世界史の授業の中にも、記念物を教材として用いて、歴史

表象自体を考察しようとする姿勢が見られる。

まず、原田智仁は、歴史に対する構築主義的な見方が主流になり、次々に新しい物語＝歴史が生産され、多様なメディアを介してそれが市場に回っている現状を踏まえ、世界史教育の課題として「歴史リテラシー」、
「歴史を読み解く力」の育成を掲げて、世界史の授業における「銅像・記念碑の読み解き」を挙げ、事例として米国のリンカン記念堂を教材として用いる世界史授業を構想する⁽¹¹¹⁾。

そして、その4通りの方法として、①ワシントンD.C.に建設されたリンカン記念堂は、リンカンが暗殺された1865年から半世紀以上遅れた1922年に完成したものであり、授業で「なぜリンカンの顕彰が遅れたのか」を問い、南北戦争が「国家に与えられた試練であり結果的に国家の結びつきを強化した」とする「戦争の神話化」が生じたことを浮き彫りにして、南北戦争の評価の変容を考えさせる、②1960年代の公民権運動を扱う中で、「なぜこの年（1963年）にワシントン大行進が行われたのか、なぜキング牧師の演説が記念堂でなされたのか」を問い、リンカンの奴隷解放宣言から100年を経ながら、なお黒人差別が根強く残っていた事実やその背景を追求させる、③国民国家の課題を扱う中で、レーニン像の撤去に関連させて、「そもそも近代国家はなぜ多くの銅像を建設するのか」を問い、その意味を探求させる、④米国の主な都市を紹介する中で、「首都のワシントン記念塔、議事堂、ホワイトハウス、アーリントン国立墓地等の分布が何を示唆するか」を問い、米国民のアイデンティティを考えさせる、を挙げている。

次に、長崎県立佐世保中央高等学校の新木武志は、「わたしたちが『歴史』に接する時、わたしたちは否応なしに『表象をめぐる闘争』に巻き込まれる。特に現代の私たちを取り巻く、映画やマンガなどによる歴史表象

は、感情に訴えかけるものであるだけに、大きな影響力をもってわたしたちに迫ってくる。そのなかで生徒が、表象に込められたメッセージを読み解く力をつけることは極めて重要である」と考え、「どのような歴史表象も『現在』をめぐって構成されたもの」ゆえに、歴史教育では「特定の歴史表象を生徒に伝えるのではなく、歴史表象そのものを取り上げ、生徒とともに分析することが必要」と主張して、イギリスの首都ロンドンにあるトラファルガー広場の空間分析を行い、教材化の方向を示している⁽¹¹²⁾。

新木によれば、19世紀後半に建設されたトラファルガー広場は、「トラファルガーの海戦やネルソンなどを記念したモニュメントが設置され、イギリスにおける集合的記憶の創出の典型的な舞台」であり、そこに込められた「イギリスの植民地支配を正当化」し「群集を帝国の国民として意識させる」といった政治的メッセージを授業で明らかにすることを通して、トラファルガー広場は、「ネルソンらの軍人、トラファルガーの海戦などをイメージさせる教材」としてではなく、「それを制作し、それらをディスプレイした社会について考えるための教材」として用いるべきとする。

しかし、センター試験同様、原田も新木も記念物の制作者の意図を解き明かすことを通して、歴史表象を行なう国民国家の意味を考察することに主眼が置かれており、記念物を通して想起される歴史像が、創り直される性質を持つことに対して、アプローチする姿勢が弱い。それゆえ、歴史表象の現在性を学ぶためには、「記憶のかたち」が表象する歴史的記憶の変容を追跡して、通時的な「表象の歴史」を学習する授業が必要ではないだろうか。それは、拙稿「歴史教育における記憶の取り扱いについて－ヴァンドーム広場の記念柱の教材化を事例に－」で示したように、単にメタヒストリーを学ぶだけではなく、コメモレイションを行なう社会の歴史（ヒストリー）を学ぶことを可能にする⁽¹¹³⁾。さらに、日露戦争の記憶に対して

は、日本とロシア双方において、共時的に戦争の記憶が表象される姿を対比させることで、より広い視野からの考察も出来よう。

ただし、授業において歴史表象に焦点を当て、それがどれだけ「真実」に迫っているかを議論することは避けるべきである。テッサ・モーリス＝スズキは、「歴史的事実が存在する、しない、をめぐる、ときには不毛とさえ思える論争」から離れて、「現在の人びとが過去を理解しようとするプロセス」、「人びとが過去の意味を創造するプロセス」に焦点を当て、「過去の出来事と人びととのあいだに開かれた、発展的な関係」を築くために、歴史的な「真実（トゥルース）」に替えて「歴史への真摯さ（ヒストリカル・トゥルースフルネス）」の追求を提唱する。それは、歴史知識の伝達を「歴史的出来事と、その出来事の記録や表現にたずさわる人たちと、その表現を見る、聞く、あるいは読む人たちとのあいだの関係の連続」と捉えた上で、「歴史への真摯さ」とは、「この関係の連鎖を理解する努力の一環」であり、「過去の叙述やイメージを私たちに伝える一連の媒介者を（できるかぎり）追跡し、なぜそのような反応をするのかを理解する努力」であるとする。そして、「その努力のなかで、過去について伝達される物語やイメージが、それを伝える人たちの思想や関心によって、それが伝達されている媒体の性格によって、そのときのわたしたちの位置によって、かたちづくられるという認識」に直面し、「過去についてのたくさんの異なる説明とイメージ」、「ひとつの出来事についてのさまざまに異なる表現」に耳を傾け、過去との「継続的な対話」を行なうことで、「歴史知識の伝達を形成する力を理解し、歴史のプロセスへのわたしたち自身の『連累』を理解する」ことが可能と考える⁽¹¹⁴⁾。

このように、歴史表象の現在性を理解するためには、「誇り／恥」という見方に囚われることなく、冷静にその関係性を理解しようとする努力が

必要である。また、歴史教育において「歴史とかかわる力」の育成を提唱する兵庫県立香寺高等学校の安達一紀も、表象としての「歴史」の中に「紛れ込んできた『現在』の解説」のために、歴史授業においては、歴史を語る「発話主体」に生徒の関心を向けさせることが大切と指摘しているが⁽¹¹⁵⁾、それに加えて、「過去の異なる表現を理解し、比較するためには、“誰がこの話をしているのか”と問うだけでなく、“いかに？”と考えることも不可欠」⁽¹¹⁶⁾と、テッサ・モーリス・スズキが指摘するように、過去に対する多様なイメージを比較・検討することが歴史授業に求められよう。

それを通して、個々人の意思とは無関係に客観的に実在するものとして受け取られている歴史知識に対し、そこに生きた人間がどのように関わり歴史像が構築されるのか、そのプロセスを理解し、生徒自身が歴史との関わり方を考える契機にすることが、可能となるのではないだろうか。

以上のような視点から、日露戦争の記憶を省みると、日露戦争後の日本においては、新たなアジア・太平洋戦争の開始と敗戦、占領という大きな社会変動を経験し、ロシアにおいてもロシア革命の勃発、ソ連の誕生と崩壊という大変動を経験したことが、共にその表象に大きく影響を及ぼしており、こうした社会的背景を抜きにして、歴史表象の是非を論じることに意味はないと思う。そして、歴史授業は過去を称賛したり弾劾したりする場ではなく、「過去の叙述やイメージを私たちに伝える一連の媒介者を追跡し、なぜそのような反応をするのかを理解する」ことや、「過去について伝達される物語やイメージが、それを伝える人たちの思想や関心によって、それが伝達されている媒体の性格によって、そのときのわたしたちの位置によって、かたちづくられる」ことを理解するために、記念される軍艦という「記憶のかたち」を手がかりとして、第2章、第3章で取り上げた資料を活用することが出来ると考える。

そこで最後に、高等学校の日本史と世界史の授業において、日露戦争を記念した軍艦を、どのように取り扱えばよいのか、具体的に以下の7つの方法を提示したいと思う。

第1は、日本史において昭和初期の歴史を扱う中で、記念艦「三笠」を中心に、なぜ「海と空の博覧会」で記念艦が会場に選ばれたのかを問い、その背景となった軍縮を巡る動きに注目させ、また「霊艦」と呼ばれるようになった時代背景を探求し、日露戦争の記憶がアジア・太平洋戦争に、どのように利用されたかを考察するものである。

第2は、日本史において現代史を扱う中で、敗戦を機にどのような日露戦争を記念した銅像や記念碑が消え去っていったか、また記念艦「三笠」はどのような運命を辿ったかを調べ、今度は記念艦の再建について見て、記念物の意味を考察すると共に、日露戦争の記憶の表象の変容について考える方法である。

第3は、日本史において現代史を扱う中で、「みかさ公園」に立つ記念碑を取り上げ、新旧の「行進曲軍艦」記念碑を比較して、そこにどのような記憶の表象の違いが見られるかを調べ、また記念碑の再建を巡ってなぜ闘争が生じるのか、その理由を考えるというものである。

第4は、世界史においてロシア史を扱う中で、なぜ帝政末期、第二次世界大戦後のスターリン時代、ソ連崩壊後のプーチン政権下で「ワリャグ」が顕彰されるのかを問い、その背景にある社会状況を調べて、ロシア社会において日露戦争の記憶が、どのように利用されてきたかを考察する方法である。

第5は、世界史においてロシア史を扱う中で、記念艦「オーロラ」を取り上げ、かつて「オーロラ」がどのような出来事を記念していたのか、また、現在は何を記念しようとしているのかを調べて比較し、記念物の意味

を考察すると共に、日露戦争の記憶の表象の変化について考えるというものである。

第6は、世界史において20世紀史を扱う中で、「三笠」、「ワリャーグ」、「オーロラ」の艦船史をもとに、日露戦争、第一次世界大戦、ロシア革命、シベリア出兵の歴史を学ぶと共に、それぞれの艦船史の中で、どのような記憶が記念・顕彰され、反対にどんな記憶が忘却されていくのかを調べ、その表象の在り方について考察する方法である。

第7は、日本史、世界史の双方において、なぜ日露戦争100周年を記念して、日本でもロシアでも軍艦に対する記念・顕彰行為が行なわれるのかを問い、その社会的背景を調べて比較対照することで、コメモレイションの意味を考察するものである。

おわりに－忘却される記憶を巡って－

記念艦「三笠」が、「海と空の博覧会」で脚光を浴びた1930（昭和5）年、東京駅において当時の首相、浜口雄幸が、右翼の青年によって銃撃され、翌年その傷がもとで死亡した。現在、東京駅の中央通路には、それを記念する小さな目印が床に埋め込まれ、近くの柱にはひっそりと「浜口首相遭難現場」のプレートが掲げられて、「犯人は、立憲民政党の浜口内閣が、ロンドン条約批准問題などで軍部の圧力に抵抗したことに不満を抱き、凶行におよんだものといわれている」と説明している。しかし、この記念物に注意を払おうとする人はほとんど見かけない。まるで浜口首相遭難の記憶が、忘却されつつあるかのような印象を受ける。そして、記念艦「三笠」の展示では、「海と空の博覧会」の記憶は、既に忘却されてしまっている。

このように、活発なメモリアルによって積極的に想起される記憶がある一方で、忘却されていく記憶も存在する。文化史研究の小関隆が、「記憶とは過去の出来事の単なる貯蔵としてではなく、現在の状況に合わせて特定の出来事を想起し意味を与える行為」であって、「個人や集団のアイデンティティが固定されたものではなく、不断に変容を遂げることに対応して、記憶も絶え間なく作り直されていく。また、『記憶に値する』と認定された何かが呼び起こされる一方では、そうでないものが排除され隠蔽される。この意味で、忘却は記憶の構成部分である」⁽¹¹⁷⁾と唱えるように、歴史的記憶が創り直されていく中で、記憶の想起と忘却とは表裏一体のものである。

本稿で取り上げた、日露戦争を記念する軍艦についても、記念されるのは「栄光」や「名誉」の記憶であって、その目的に合わない事故や捕獲、

敗走といった「不名誉」な記憶が排除され、また、日本海海戦の「栄光」の記憶を巡っても、昭和初期の「一等国」や「尽忠報国」の記憶から、敗戦後の「独立を守った」記憶や「アジア人の覚醒」の記憶へと、時代によって想起される内容が異なり、記憶が上書きされることで、それ以前の記憶の在り様が隠蔽されてしまっていることが、記憶の忘却を裏付けている。

そして、こうした忘却される記憶が提起するのは、我々が如何に忘れやすく、記憶の書き換えに対して無意識であるかということであり、それを銘記する必要があるだろう。

現在、記念艦「三笠」の入り口には、戦艦「大和」の巨大な主砲弾が展示されており、100年前の戦争を記念する場で、60年前の戦争が同時に記念されている。記念艦「三笠」が敗戦の記憶を払拭し、再建されたことは先述したが、今度は払拭した敗戦の記憶の中に、プラスの価値を見出すかのように、戦艦「大和」の砲弾は立っている。(図2参照)

日露戦争の終戦から100周年、そしてアジア・太平洋戦争の終戦から60周年を迎えた2005(平成17)年、4月には広島県呉市に戦艦「大和」を記念する「大和ミュージアム」がオープンし、12月には映画『男たちの大和』が公開されるなど、アジア・太平洋戦争時の軍艦に対しても、活発な記念行為が行なわれている。それはまるで、ロシアの巡洋艦「ワリャーグ」に対する顕彰を彷彿とさせる。戦艦「大和」を記念することで、どのような戦争の記憶が想起され、反対に忘却されていくのか、また、新たに軍艦の記念を生み出す、現在の日本の社会とは一体何であるのか、しっかりと見つめ考えたいと思う。

註

- (1) 例えば、朝日新聞の論説主幹・若宮啓文は、2005年12月26日の同紙に「戦後60年 政治に軍隊の記憶が消え…」と題する論説を掲載している。
- (2) 拙稿「歴史教育における記憶の取り扱いについて－ヴァンドーム広場の記念柱の教材化を事例に－」『朝日大学教職課程センター研究報告』第13号、2005年、3－44頁。
- (3) M・アルヴァックス、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989年。
- (4) パトリック・H・ハットン、村山敏勝訳「現代史学における記憶の位置づけ」『現代思想』1995年1月号、青土社、149－150頁。
- (5) 「史跡を訪ねて 民族の誇りここに 記念艦三笠」『読売新聞』2004年2月21日。
- (6) 日本海海戦を記念して、ハセガワより2005年5月末に発売された。
- (7) 「露艦隊が韓国到着 きょう慰霊と記念碑除幕」『産経新聞』2004年2月11日、「現代に生きる日露戦争 露で『英雄伝説』復活」『読売新聞』2004年4月25日、「日露開戦から100年(5)忘れられた日本の足跡 露水兵、韓国で『愛国英雄』」『産経新聞』2004年5月21日等で報道されている。
- (8) ロシアのズベズダ社が製作し、2005年7月より発売。
- (9) 2004年3月、ポーツマス講和100周年を記念して、山梨学院大学主催、ロシア海軍中央博物館共催により、サンクト・ペテルブルク国際会議が開催され、記念艦「オーロラ」において、「オーロラ号と三笠号の100年後の再会」が催された。
- (10) 戸川幸夫「戦艦三笠の危機」東郷会編『東郷』昭和45年1月号、27－29頁。
- (11) 大江志乃夫『兵士たちの日露戦争 500通の軍事郵便から』朝日選書349、朝日新聞社、1988年、222頁。
- (12) 記念艦「三笠」ホームページを参照。

- (13) 尾崎主税『聖将東郷と靈艦三笠』三笠保存会, 1935年, 95頁。
- (14) 前掲書, 98頁。
- (15) 前掲書, 99-100頁。
- (16) 前掲書, 102-103頁。
- (17) 『週間20世紀 大正15年・昭和元年 「昭和」開幕』No.63, 朝日新聞社, 2000年, 25頁。
- (18) 木下直之「日露戦争をかたるもの」小森陽一・成田龍一編『日露戦争スタディーズ』紀伊国屋書店, 2004年, 31頁。
- (19) 財団法人三笠保存会編『日本海々戦二十五周年記念 海と空の博覧会報告』三笠保存会, 1930年, 401頁。
- (20) 前掲書, 1頁。
- (21) 前掲書, 1-3頁。
- (22) 『週間20世紀 昭和5年 浜口首相狙撃さる』No.67, 朝日新聞社, 2000年。
- (23) 財団法人三笠保存会編『日本海々戦二十五周年記念 海と空の博覧会報告』三笠保存会, 1930年, 338頁。
- (24) 前掲書, 109-121頁。
- (25) 前掲書, 343-345頁。
- (26) 前掲書, 349頁。
- (27) 前掲書, 352-353頁。
- (28) 前掲書, 355頁。
- (29) 田中宏巳『東郷平八郎』ちくま新書208, 1999年, 178頁。
- (30) 前掲書, 219頁。
- (31) 田中宏巳「忠君愛国的『日露戦争』の伝承と軍国主義の形成-小笠原長生の役割を通して-」國史學會編『國史學』126号, 1985年, 57頁。
- (32) 前掲論文, 46頁。

- (33) 前掲論文, 57頁。
- (34) 小笠原長生『聖将 東郷平八郎』改造社, 1934年。
- (35) 尾崎主税『聖将東郷と霊艦三笠』三笠保存会, 1935年, 95頁。同年には旅順口閉塞作戦に参加し沈められた「報国丸」が引き上げられており(現・旅順監獄博物館に「昭和10年」と刻まれたその錨が展示してある), 日本海海戦と共に旅順口閉塞作戦に対する記念活動も活発に行なわれている。
- (36) 前掲書, 132頁。
- (37) 前掲書, 4頁。
- (38) 前掲書, 5頁。
- (39) 前掲書, 1頁。
- (40) 前掲書, 159-160頁。
- (41) 同年には, 「軍神」広瀬武夫と橋周太を祀った広瀬神社と橋神社も創建され, 皇紀2600年を記念して, 日露戦争で活躍した軍人に対する顕彰活動が活発に行なわれている。
- (42) 木下直之『世の途中から隠されていること-近代日本の記憶』晶文社, 2002年, 52頁。
- (43) 伊藤正徳『大海軍を想う』光人社NF文庫, 2002年, 288頁。
- (44) 下村海南「軍艦三笠の現状について」財団法人水交会編『水交』昭和32年, 第47号, 12-16頁。
- (45) 「GHQ宗教部長靖国神社権宮司会談記録」(1946年1月21日), 木下直之『世の途中から隠されていること-近代日本の記憶』晶文社, 2002年, 52-54頁。
- (46) 谷村政次郎『行進曲「軍艦」百年の航跡』大村書店, 156-161頁。
- (47) 伊藤正徳『大海軍を想う』光人社NF文庫, 2002年, 290頁。
- (48) 伊藤正徳「『三笠』偉大と悲惨-国敗れて記念艦朽つ-」『文芸春秋』昭和32年8月号, 104頁。

- (49) 伊藤正徳『大海軍を想う』光人社NF文庫，2002年，288－289頁。
- (50) 佐野純雄「横浜と東郷元帥（五）」東郷会編『東郷』昭和51年1月号，23頁。
- (51) 司馬遼太郎も『街道を行く42 三浦半島記』（朝日文庫，1998年）の中で，
「一時期，カフェーになっていたという説もある」（204頁）と紹介するように，このエピソードは根強く生き続け，名越二荒之助著の『世界に生きる日本の心』（展転社，1987年）では，「横須賀市では民間に払い下げて，文化的に経営することを考え，かねてから申請していた湘南振興会社に，マスト等の撤去作業を請負わせました。湘南振興では撤去作業が終ると，館内で米軍相手のキャバレー的な風俗営業を始めました。東郷長官室はキャバレー・トーゴーとなり，加藤友三郎や秋山真之参謀等のいた参謀長室は，カフェーになったといひます。やがて昭和二十五年，朝鮮動乱が始まると，艦内の鉄，銅，真鍮等，目ぼしいものは殆んど売却して暴利をむさぼったと聞きます」（219p）と，また岡田幹彦著の『東郷平八郎 近代日本をおこした明治の気概』（展転社，1997年）でも，「敗戦後，かつての英雄東郷は軍国日本の悪しき象徴として見捨てられ，その乗艦三笠は見るも無残な扱いを受けた。大砲，艦橋，煙突，マスト等は取り除かれ，丸裸となって軍艦の体をなさず，東郷のいた司令長官室は酒場，士官室は踊り場と変わり果て，飲んだくれの米兵がたむろするに至った。まことにあわれをとどめる，敗戦日本のみじめな有様であった」（14－15頁）とされており，さらに，朝日新聞編集委員の佐藤国雄が著した『元帥の晩年』（朝日新聞社，1990年）でも，「横須賀市は払い下げを申請していた業者にまかせた。『文化的に利用する』といていた業者は，撤去した兵器類の鉄を朝鮮動乱の屑鉄ブームに便乗してもうけ，さらに艦内外で米兵相手の風俗営業をはじめた。東郷の長官室は『キャバレー・トーゴー』となり，半裸の女性がピンクサービスをした。士官室はダンスホール，参謀長室は『カフェー・カトー』といった調子。砲塔やマス

トをもぎとられた『三笠』は『寝ているカバ』のようだった」(73頁)とされるなど、風説が風説を呼んで「事実」として定着した観がある。

- (52) 伊藤正徳『大海軍を想う』光人社NF文庫, 2002年, 293-294頁。
- (53) 前掲書, 287-290頁。
- (54) C・W・ニミッツ「三笠と私」『文芸春秋』昭和33年2月号, 57-58頁。
- (55) 伊藤正徳「『三笠』偉大と悲惨-国敗れて記念艦朽つ-」『文芸春秋』昭和32年8月号, 102頁。
- (56) 小泉信三「国民自重の精神」財団法人水交会編『水交』昭和34年, 第67号, 3-6頁。
- (57) 佐野純雄「横浜と東郷元帥(五)」東郷会編『東郷』昭和51年1月号, 23頁。
- (58) 清水多嘉示「作者の言葉」東郷司令長官銅像建設委員会配布『連合艦隊指令長官 東郷平八郎銅像』パンフレット。
- (59) 木下直之『世の途中から隠されていること-近代日本の記憶』晶文社, 2002年, 378頁。
- (60) 名越二荒之助『世界に生きる日本の心』展転社, 1987年, 218頁。
- (61) 谷村政次郎『行進曲「軍艦」百年の航跡』大村書店, 157頁。
- (62) 前掲書, 148頁。
- (63) 1942(昭和17)年9月10日の朝日新聞では、「不朽の名曲-軍艦行進曲の大記念碑が建立される」と、その建立計画を紹介する記事の中で、「『守るも攻むるも黒鉄の』あの勇壮な旋律がラジオから流れ出すと今や国民はハタと鳴りをしづめ、拳を握って無敵海軍の捷報に固唾を呑む。この壮美な名曲は大東亜戦争開始以来七洋を切り拓く帝国海軍の大戦果をのせて国民の脳裡に深く刻まれ、幾十年海軍将兵の情操を育てて来たが国民の愛敬が凝って大東亜戦必勝の決意を表象する記念碑建立となったものであり曲の記念碑は珍しいものとされる」と記されている。

- (64) 「塗りつぶされた軍艦マーチ 横須賀の記念碑『好戦的』と歌詞にセメント」
『産経新聞』夕刊2001年5月14日。
- (65) 三笠保存会公開資料「平成16年度事業報告書」財団法人三笠保存会, 2005年。
- (66) 扶桑社版『中学社会 新しい歴史教科書』2002年, 222頁。
- (67) 前掲書, 223頁。
- (68) 「史跡を訪ねて 民族の誇りここに 記念艦三笠」『読売新聞』2004年2月21日。
- (69) 『月刊モデルグラフィックス』No.251, 大日本絵画, 2005年, 巻頭特集。
- (70) 「現代に生きる日露戦争 露で『英雄伝説』復活」『読売新聞』2004年4月25日。
- (71) 「コリアーズ」編・小谷まさ代訳『米国特派員が撮った日露戦争』2005年, 54頁。
- (72) 露国海軍軍令部編, 帝国海軍軍令部翻訳『千九百四, 五年露日海戦史(復刻版) 上巻』芙蓉書房, 2004年, 124頁。
- (73) 「コリアーズ」編・小谷まさ代訳『米国特派員が撮った日露戦争』2005年, 118頁。
- (74) 前掲書, 120頁。
- (75) 前掲書, 121頁。
- (76) 前掲書, 121頁。
- (77) 露国海軍軍令部編, 帝国海軍軍令部翻訳『千九百四, 五年露日海戦史(復刻版) 上巻』芙蓉書房, 2004年, 458頁。
- (78) 「現代に生きる日露戦争 露で『英雄伝説』復活」『読売新聞』2004年4月25日。
- (79) 清水威久『ソ連と日露戦争』原書房, 1973年, 75-76頁。
- (80) 前掲書, 「はしがき」。

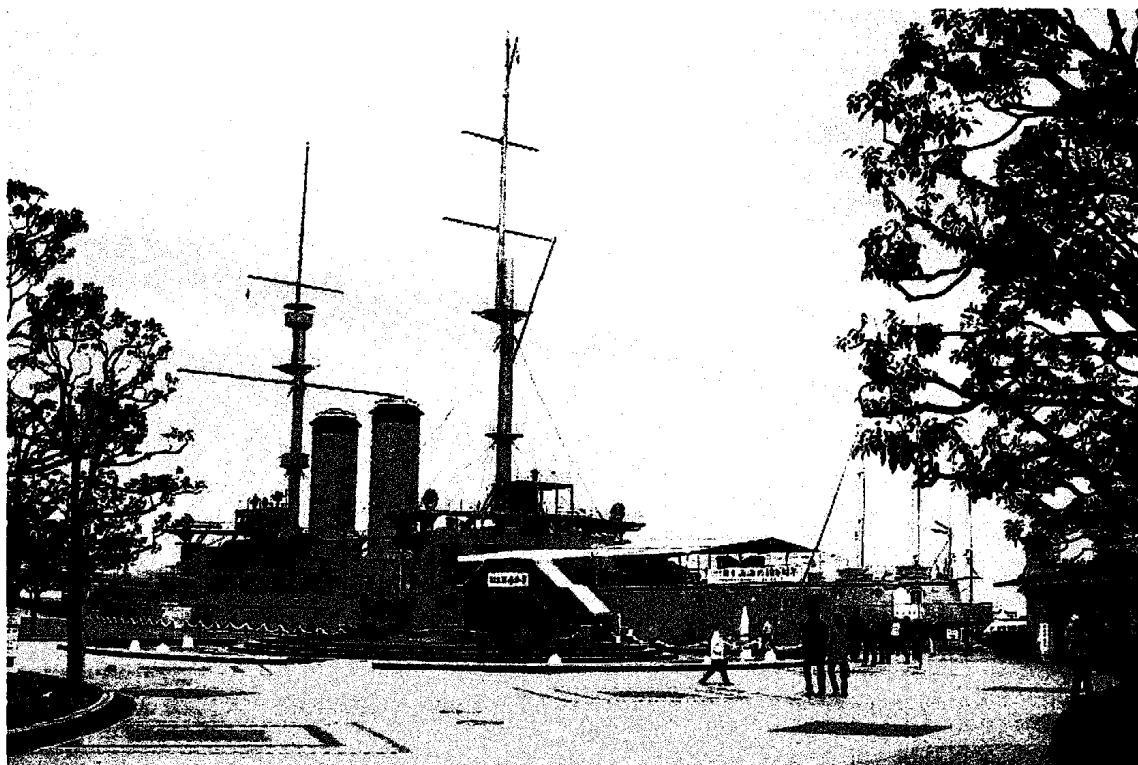
- (81) 前掲書, 4頁。
- (82) 前掲書, 302頁。
- (83) 前掲書, 271-272頁。
- (84) 前掲書, 272頁。
- (85) 前掲書, 272頁。
- (86) 平間洋一「ロシア／ソビエト軍艦『ワリヤーグ』四代記」『世界の艦船』
2004年8月号, 94頁。
- (87) ソ連時代, 両艦の模型も製造・販売され, 近年それを復刻したものが, バウ
マン社によって発売されている。
- (88) 2005年10月7・8日に行なわれた「山梨学院創立60周年記念事業 インター
ナショナル・カンファレンス in サカオリ」におけるセルゲイ・ウラジミロ
ヴィッチ・チェルニャフスキー・ロシア中央海軍博物館展示部長の発表「ロ
シア国民の記憶にのこる日露戦争」による。
- (89) NHK取材班「レニングラード物語 華麗なる都の250年」日本放送出版協
会, 1983年, 140-142頁。
- (90) ノビコフ・プリボイ, 上脇進訳『ツシマ(上)バルチック艦隊遠征』原書
房, 2004年, 83頁。
- (91) ノビコフ・プリボイ, 上脇進訳『ツシマ(下)バルチック艦隊壊滅』原書
房, 2004年, 339-344頁。
- (92) セルゲイ・ウラジミロヴィッチ・チェルニャフスキー・ロシア中央海軍博物
館展示部長の御教示による。
- (93) 同海軍博物館展示部長の御教示による。
- (94) 「交流150年 司馬遼太郎のロシア 日露戦争の追憶」『朝日新聞』2005年
9月23日。
- (95) 翌2005年10月には, 今度は「ツシマ会」関係者が日本を訪れ, 記念艦「三笠」

艦上において同様のレセプションが行なわれた。

- (96) 「現代に生きる日露戦争 露で『英雄伝説』復活」『読売新聞』2004年4月25日。
- (97) 「日露戦争敗北の怨念 『強い国家』への願い込め…」『産経新聞』2002年6月8日。
- (98) ドミトリー・B・パブロフ「日露戦争と世界 100年後の視点から」『平成16年度 戦争史研究国際フォーラム報告書』防衛研究所, 2005年, 37頁。
- (99) 前掲論文, 37頁。
- (100) 「現代に生きる日露戦争 露で『英雄伝説』復活」『読売新聞』2004年4月25日。
- (101) 「日露開戦から100年(5)忘れられた日本の足跡 露水兵, 韓国で『愛国英雄』」『産経新聞』2004年5月21日。
- (102) 「現代に生きる日露戦争 露で『英雄伝説』復活」(『読売新聞』2004年4月25日)を著した瀬口利一記者は, 近年のロシアでの日露戦争観に対して「そこには, 日露戦争の敗因を冷静に分析するよりは, 日本側を『加害者』に, ロシア側を『被害者』に見立てるゆがんだ『愛国主義』の傾向がはっきりと見て取れる」と評するが, 同じ視点から日本を省みる姿勢は見られない。
- (103) 安達弘『新しい社会科授業への挑戦9 人物学習でつくる歴史学習』明治図書, 2001年, 113-128頁, 199-200頁。
- (104) 原田智仁「世界史教育の改善 歴史リテラシーの可能性(7)銅像・記念碑の読み解き」文部科学省教育課程科編『月刊 中等教育資料』平成16年4月号, 42-43頁。
- (105) 藤岡継平『挿画を中心とせる国史教育-尋常小学国史挿画の解説と其の精神』目黒書店, 1938年, 201-205頁。北原恵「『三笠艦橋の図』と歴史の記憶」小森陽一・成田龍一編『日露戦争スタディーズ』紀伊國屋書店, 2004

年, 36-38頁を参照。

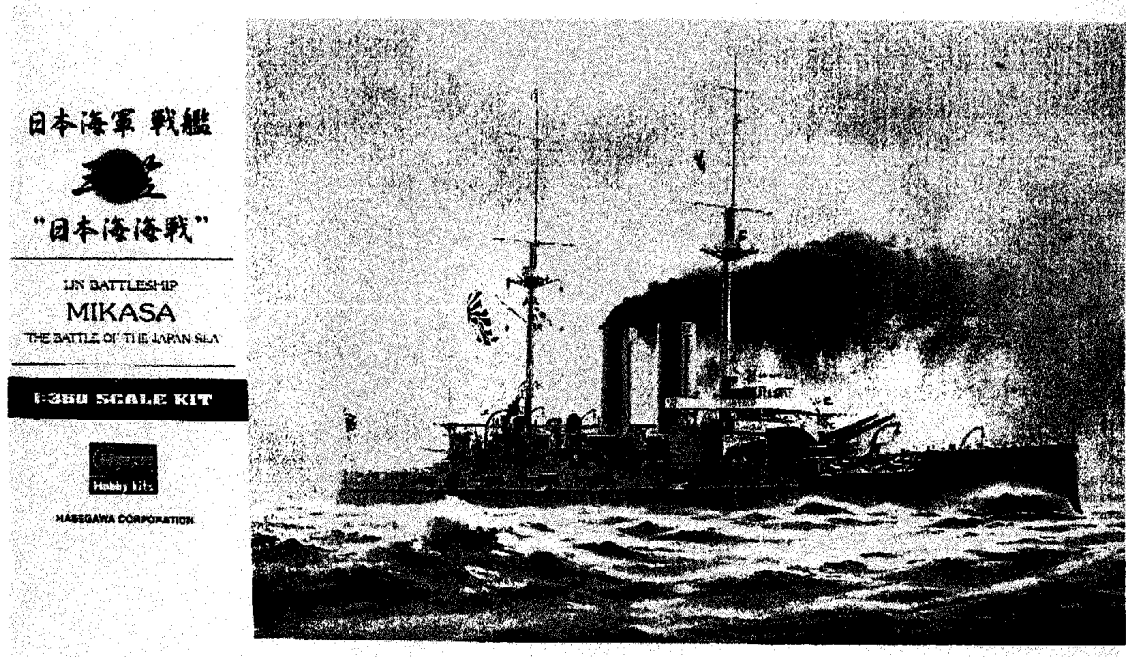
- (106) 東京書籍版『日本史A 現代からの歴史』2004年, 2-3頁。
- (107) 二宮宏之「歴史の作法」上村忠男他編『歴史を問う4 歴史はいかに書かれるか』岩波書店, 2004年, 11頁。
- (108) センター試験問題「世界史B」2002年実施, 52頁。
- (109) センター試験問題「世界史A」2004年実施, 4-6頁, 同「世界史B」2004年実施, 32-34頁。
- (110) センター試験問題「世界史A」2005年実施, 4, 9頁, 同「世界史B」2005年実施, 32, 37頁。
- (111) 原田智仁「世界史教育の改善 歴史リテラシーの可能性(7)銅像・記念碑の読み解き」文部科学省教育課程科編『月刊 中等教育資料』平成16年4月号, 42-43頁。
- (112) 新木武志「歴史教育における表象分析の意義と課題—トラファルガー広場のモニュメント空間分析を中心に—」『史潮』新46号, 1999年, 58-71頁。
- (113) 拙稿「歴史教育における記憶の取り扱いについて—ヴァンドーム広場の記念柱の教材化を事例に—」『朝日大学教職課程センター研究報告』第13号, 2005年, 3-44頁。
- (114) テッサ・モーリス・スズキ, 田代泰子訳『過去は死なない メディア・記憶・歴史』岩波書店, 2004年, 33-35頁。
- (115) 安達一紀『人が歴史とかかわる力 歴史教育を再考する』教育資料出版会, 2000年, 115-116頁。
- (116) テッサ・モーリス・スズキ, 田代泰子訳『過去は死なない メディア・記憶・歴史』岩波書店, 2004年, 289頁。
- (117) 小関隆「コメモレイションの文化史のために」阿部安成他編『記憶のかたち コメモレイションの文化史』柏書房, 1999年, 7-8頁。



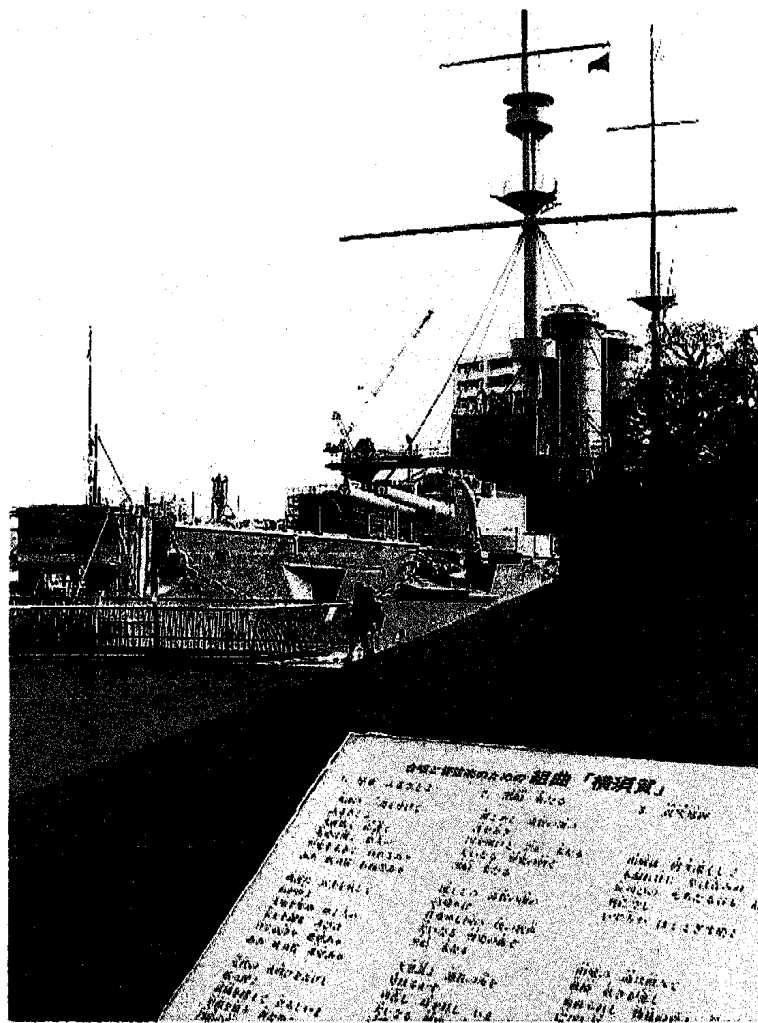
【図1】 記念艦「三笠」（神奈川県横須賀市）



【図2】 記念艦「三笠」に掲げられた横断幕と建立された戦艦「大和」の主砲弾



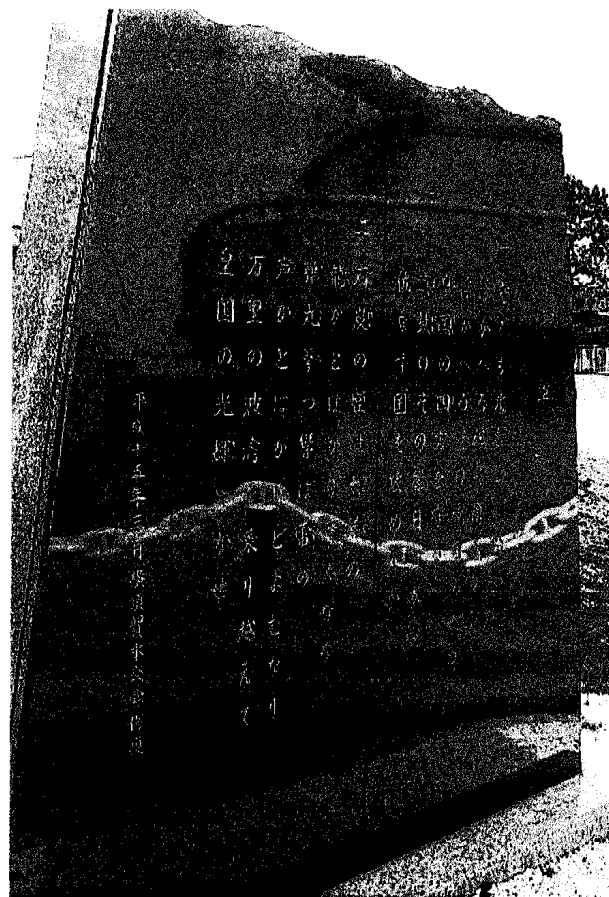
[図3] 日本海海戦100周年を記念して発売された「三笠」の模型（発売元：ハセガワ）



[図4] 記念艦「三笠」艦首近くに立つ「合唱と管弦楽のための組曲『横須賀』」記念碑



[図5] 記念艦「三笠」艦尾近くに立つ「行進曲軍艦」記念碑



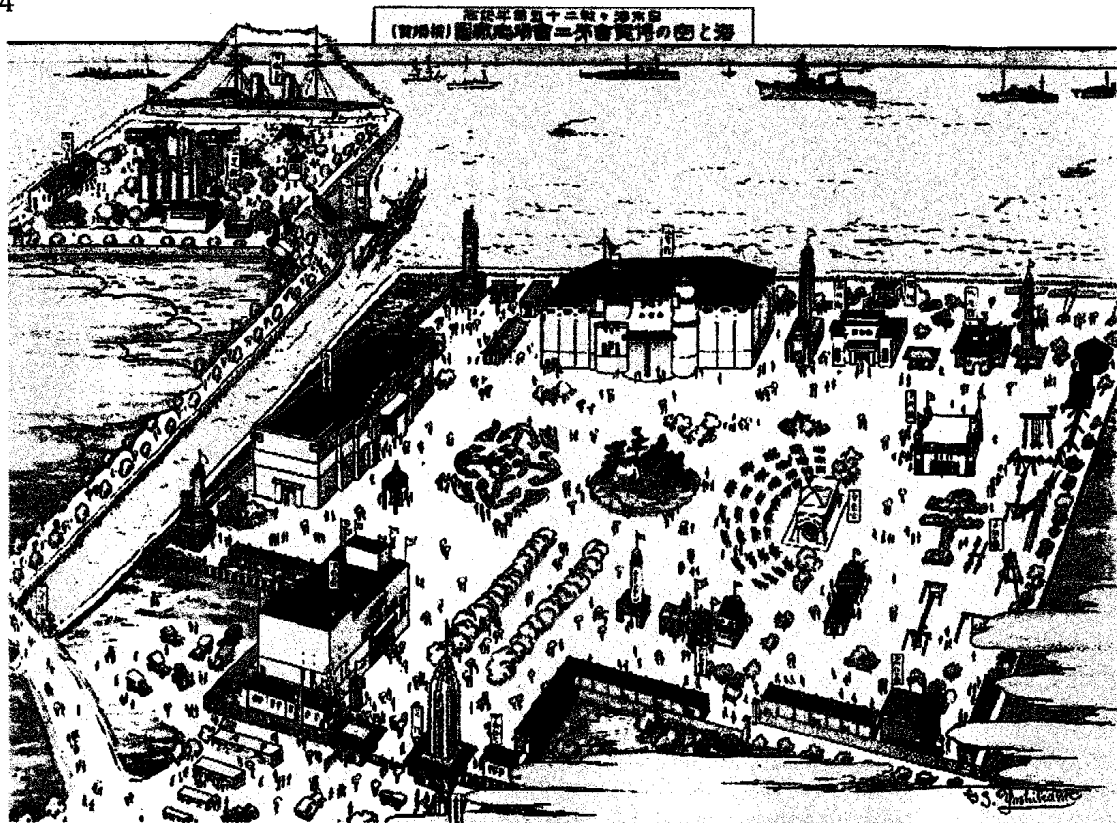
[図6] 「修復」された「行進曲軍艦」記念碑の背面



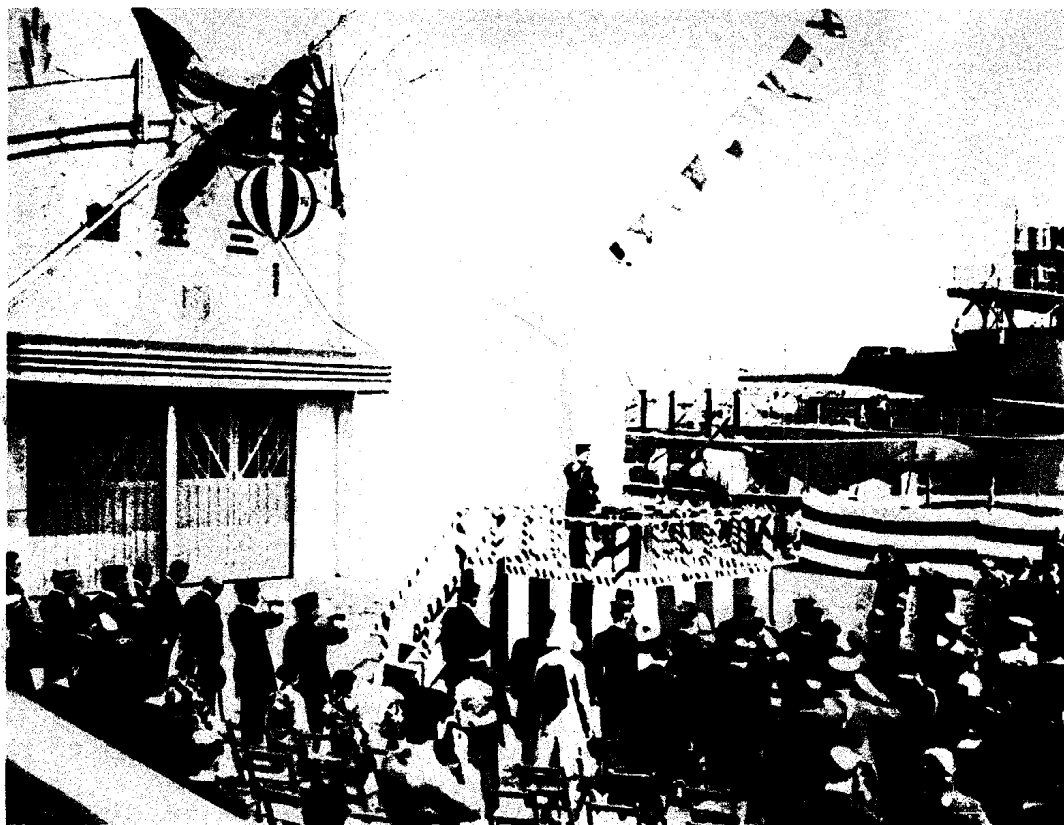
〔図7〕 記念艦「三笠」保存記念式典での東郷元帥と皇太子（昭和天皇）



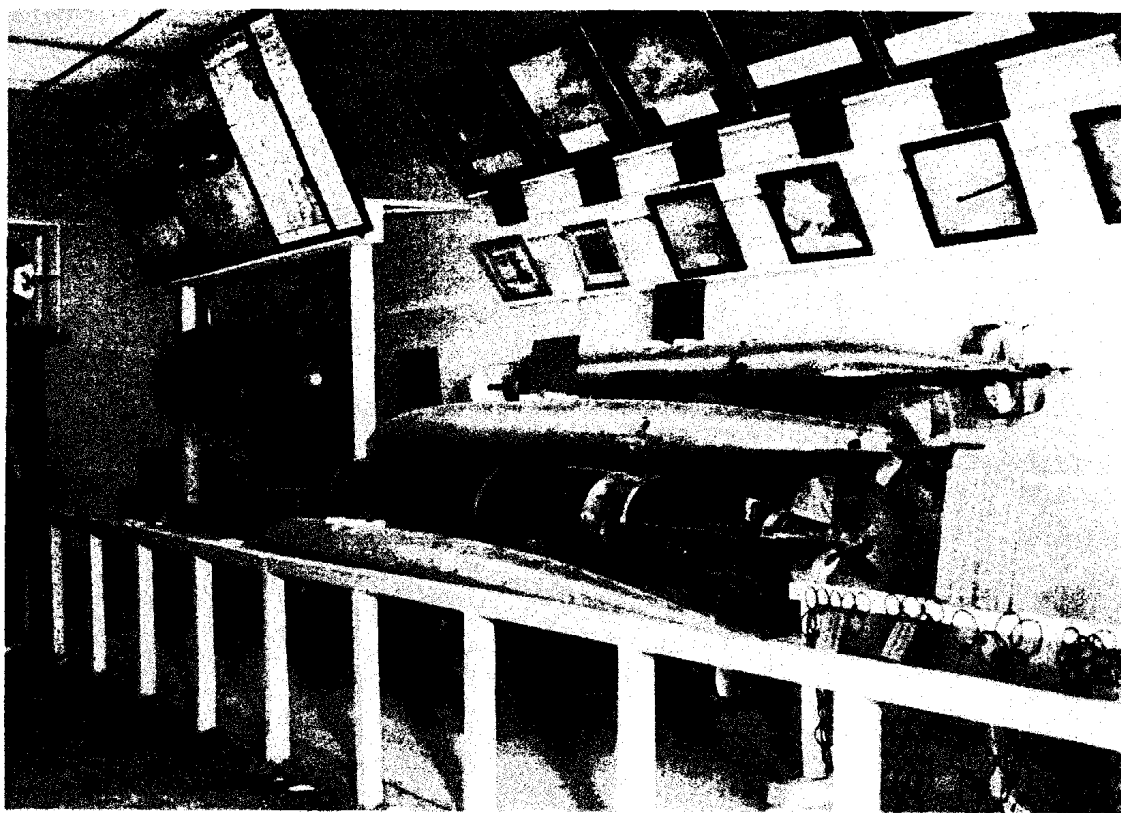
[図8] 昭和5年開催の「海と空の博覧会」ポスター



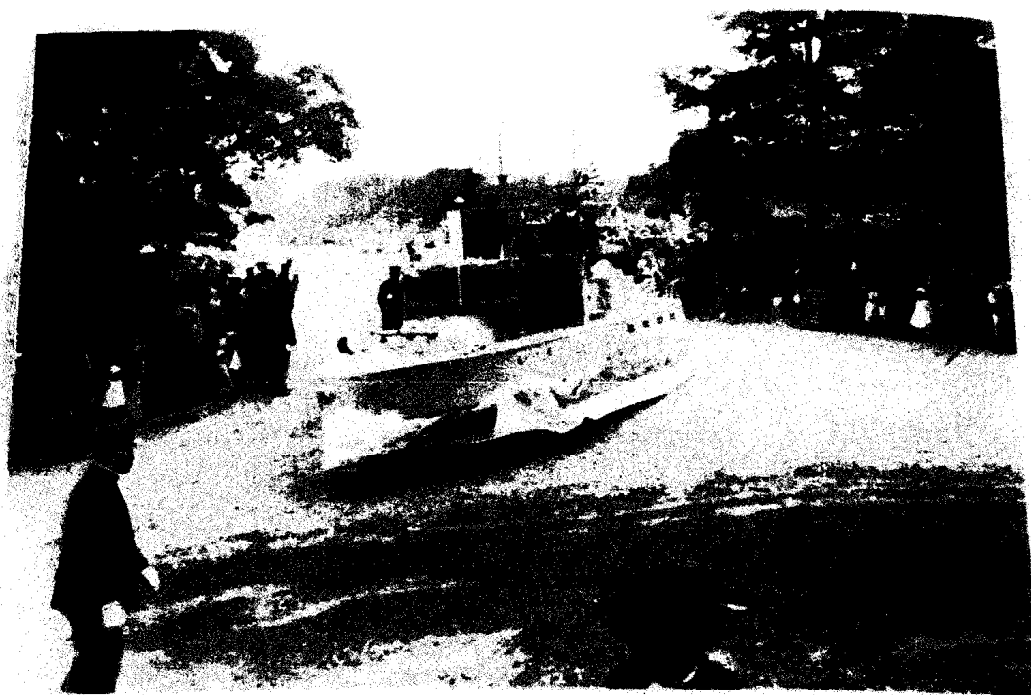
〔図9〕 「海と空の博覧会」第2会場（横須賀）全景



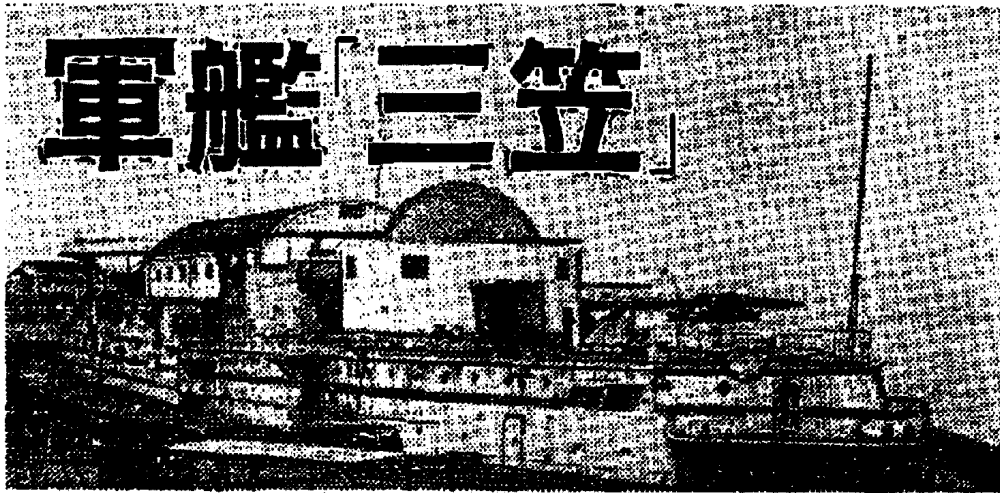
〔図10〕 「海と空の博覧会」第2会場の「三笠館」と「三笠」



〔図11〕 「海と空の博覧会」における「三笠館」内の魚雷の展示

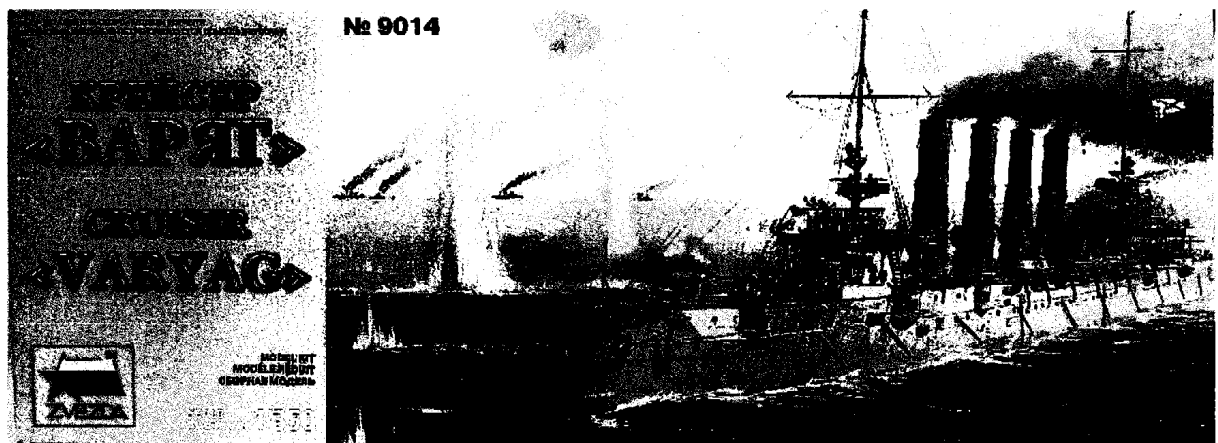


〔図12〕 「海と空の博覧会」を記念して行われた「三笠」のパレード



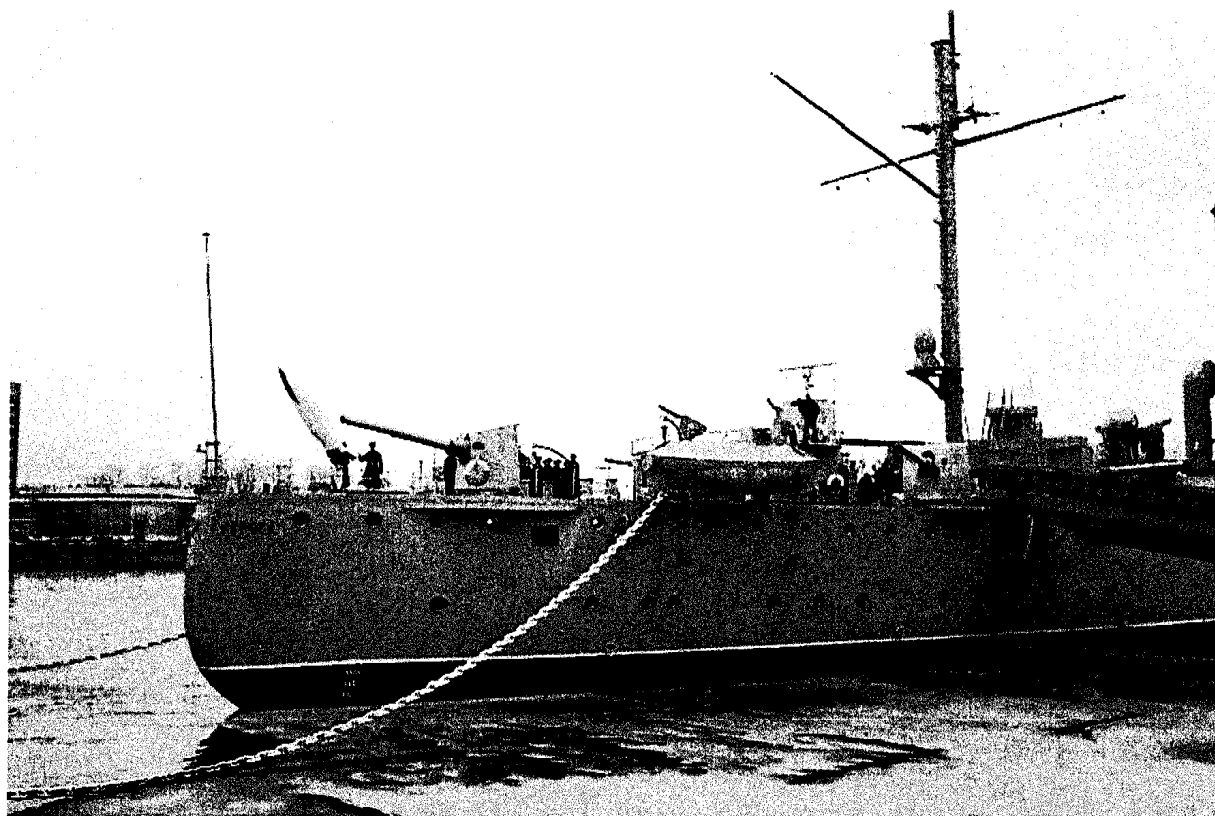
日本海海戦で東郷元帥が乗った旗艦三笠は横須賀港にコンクリートで固められたまま戦後荒れるにまかされていたが、最近旧海軍士官を中心としたグループが「由緒ある艦を重要文化財にしよう」という運動を起し、これに対して「ぶざまな残がいを見るにしのびないからスクラップにして新に三笠艦を記念する建物を建てろ」という声も起り戦後十年見捨てられていた三笠がいま横須賀の話題をさらっている。

〔図13〕昭和30年当時の児童遊園地「みかさ園」



〔図14〕仁川沖海戦を記念して発売された「ワリヤーグ」の模型

(発売元：ズベズダ社)



【図15】 記念艦「オーロラ」 (サンクト・ペテルブルク市)



【図16】 記念艦「オーロラ」で開催された「オーロラ号と三笠号の100年目の再会」



[図17] ソ連時代に発売されていた「オーロラ」の模型の復刻版

(発売元：パウマン)



[図18] ソ連時代に発売されていた「ボチョムキン」の模型の復刻版

(発売元：パウマン)

資料出典

- [図 1] 著者撮影 (2005年3月19日)。
- [図 2] 著者撮影 (2005年3月19日)。
- [図 3] 著者撮影。
- [図 4] 著者撮影 (2005年3月19日)。
- [図 5] 著者撮影 (2005年3月19日)。
- [図 6] 著者撮影 (2005年3月19日)。
- [図 7] 尾崎主税『聖将東郷と靈艦三笠』三笠保存会, 1935年。
- [図 8] 財団法人三笠保存会編『海と空の博覧会記念帖 日本海々戦二十五周年記念』三笠保存会, 1930年。
- [図 9] 前掲書。
- [図10] 前掲書。
- [図11] 前掲書。
- [図12] 財団法人三笠保存会編『日本海々戦二十五周年記念 海と空の博覧会報告書』三笠保存会, 1930年。
- [図13] 『毎日新聞』(夕刊) 1955年 10月12日。
- [図14] 著者撮影。
- [図15] 山梨学院大学提供(2004年3月19日撮影)。
- [図16] 山梨学院大学提供(2004年3月19日撮影)。
- [図17] 著者撮影。
- [図18] 著者撮影。

謝 辞

本研究にあたっては、宮田研究奨励金を御交付頂いた朝日大学理事会並びに理事長に対し、感謝の意を表したい。また、貴重な資料を御提供頂いた東郷会機関誌『東郷』編集部、財団法人水交会機関誌『水交』編集部、財団法人日本新聞教育文化財団・新聞ライブラリーに対して、そして御教示頂くと共に写真を御提供頂いた国際シンポジウム「山梨学院創立60周年記念事業 インターナショナル・カンファレンス in サカオリ」（2005年10月開催）参加の諸先生方と主催者である山梨学院大学に対して、感謝の意を表したい。最後に、教育現場での歴史授業に対する真摯な姿勢を学び、長年にわたって御指導を賜った、前文部科学省視学官・富山大学教授佐伯真人先生の御退官に際し、心よりの御礼を申し上げたい。